

滿洲農村民謡集

KD331
5



0054873000

0054873-000

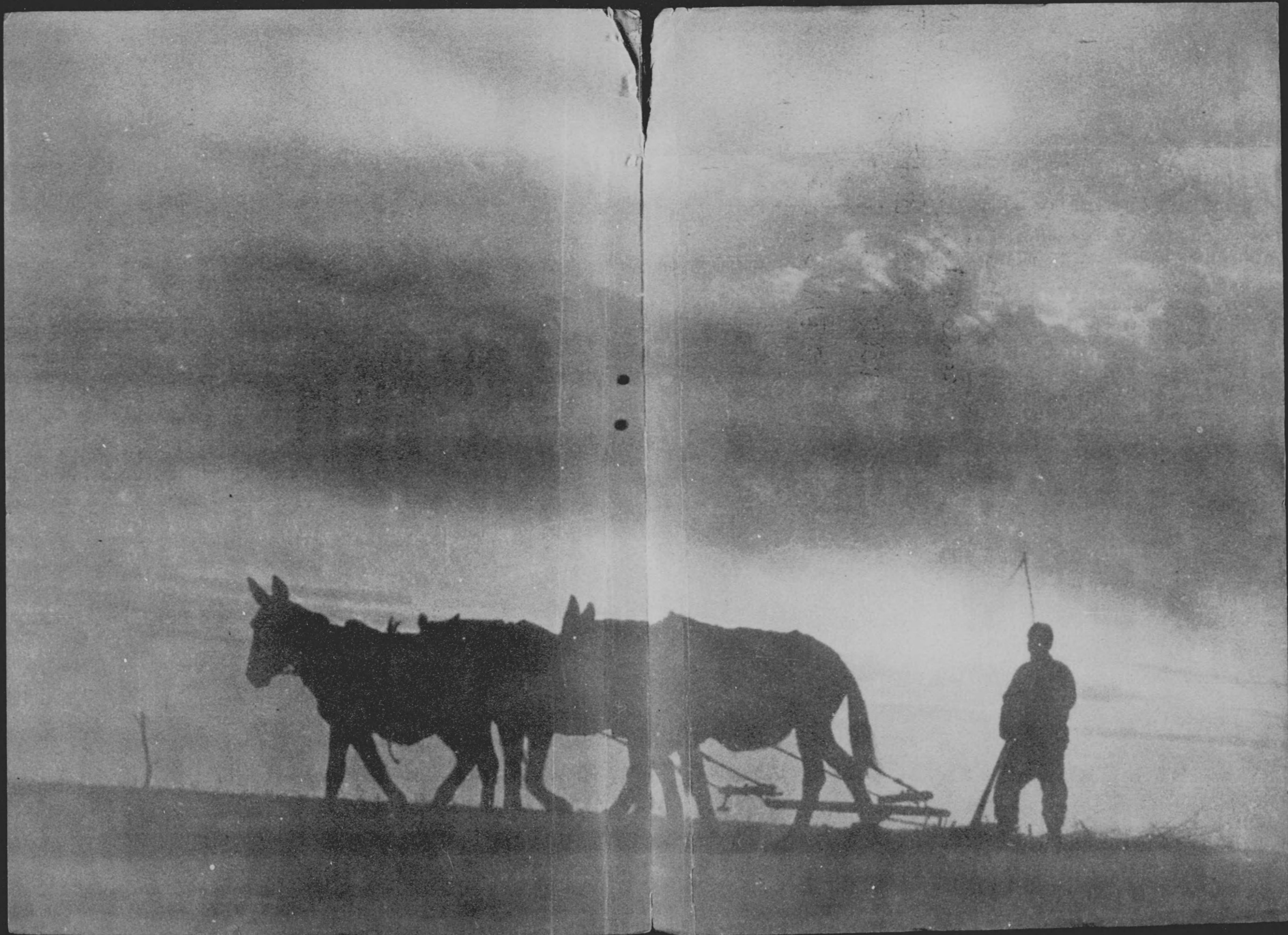
KD331-5

滿洲農村民謡集

滿州事情案内所

1940

AID



滿洲農村民謠集

滿洲事情案內所刊

〔滿洲事情案內所刊 89〕

KD331

5



835809

序

建國既に十年に垂々とする滿洲國の現状は、廣く世界史の上から見て幾多驚異すべき事象を示唆してゐるが、現實の國情を理解する上には、この複合民族國家を構成する大多數の滿・漢兩民族の性情を先づ知悉してかゝる必要があらう。これがため現在あらゆる角度より種々の考察が行はれつつあるが、茲では滿・支農村に古くより謠はれて來つた各種の民謠を取り上げ、その底を流れる滿・漢兩民族の特異な性情を究めんと試みた。蓋し滿・支農村の間に自ら培はれ、古くより親しまれ來つた民謠の中にこそ、赤裸々な彼等の心情がより多く語られてゐるからである。

本所は嘗て「滿洲の傳説と民謠」を公にしたが、今回は更にこれに幾多の新資料を加へ、「滿洲農村民謠集」として獨立刊行することゝした。その

内容に就てはもとより完璧を期し難かつたが、廣く滿洲事情の研究に資するところ多大なることを思ひ、敢て一般好學の士に贈る所以である。

本書擔當執筆者 職員 鈴木 甫。

康徳七年十月十八日

滿洲事情案内所にて

奥 村 義 信

一、歲時に關するもの

目 次

(イ)	臘 八 師走八日	：	：	：	：	：	：	：	：	一
(ロ)	辭 竈 竈神昇天	：	：	：	：	：	：	：	：	一
(ハ)	竈王爺 竈神	：	：	：	：	：	：	：	：	二
(ニ)	賣財神 財神賣り	：	：	：	：	：	：	：	：	三
(ホ)	過 年 年末	：	：	：	：	：	：	：	：	三
(ヘ)	辦置年 お正月準備	：	：	：	：	：	：	：	：	四
(ト)	大吉大利 大儲け	：	：	：	：	：	：	：	：	八
(チ)	過 年 お正月	：	：	：	：	：	：	：	：	九
(リ)	過中秋 中秋節	：	：	：	：	：	：	：	：	一〇

八、諷刺、雜

(イ)	打櫻桃	さくらんぼをとる	九〇
(ロ)	張大嫂	張嫂さん	九一
(ハ)	懶學謠	怠けものゝ歌	九二
(ニ)	懶大嫂	怠け嫂さん	九二
(ホ)	望一望	見渡せば	九四
(ヘ)	郷裏大姐	田舎のねえさん	九四
(ト)	説老婆	嫁取り	九五
(チ)	莓豆花	莓の花	九七
(リ)	還債	借金返済	九八
	1. 趕廟	廟詣り	八八
	2. 小寡婦	小さな寡婦	八九

(ハ)	寡婦		
(ロ)	夫婦善不善		
	1. 好妻房	いゝ嫁さん	八二
	2. 不同郷	出戻らぬ	八三
	3. 菊花兒	菊の花	八四
	4. 槐樹底下	アカシヤ樹の下	八五
	5. 懶大嫂	怠け女房	八五
	6. 懶老婆	怠け女房	八六
	7. 農婦	農村女	八七
	8. 公雞	をんどり	八七
	2. 矮女婿	ちびの婿さん	七八
	3. 小丈夫	小さな夫	八〇
	4. 不叫娘	母と呼ばず	八〇

九、風俗的なもの

(ア)	小板櫓	板の腰掛け	………	九九
(イ)	哭爹媽	父母の死を悲しむ	………	一〇〇
(ロ)	不開窗	窓をあけない	………	一〇一
(ハ)	種田錢	百姓の財産	………	一〇二
(ニ)	推豆腐	豆腐にすれば	………	一〇二
(ヒ)	錯算命	外れた占ひ	………	一〇三
(ヘ)	生了白鬚子	白髮の翁となりけり	………	一〇四
(セ)	反常	事も過ぎると	………	一〇六
(イ)	破牛車	こわれ牛車	………	一〇七
(ロ)	千金寨	撫順	………	一〇八
(ハ)	東三省三怪	滿洲三不思議	………	一〇九

一〇、他三題

(ニ)	東三省三奇	滿洲三不思議	………	一〇九
(ホ)	滿洲的三宗寶	滿洲三寶	………	一一〇
(イ)	鴉片	片	………	一一一
	1. 鴉片	阿片	………	一一一
	2. 鴉片	阿片	………	一一六
(ロ)	纏足	足	………	一一七
	纏足	纏足	………	一一七
(ハ)	多妻		………	一一九
	1. 第四夫人	第四夫人	………	一一九
	2. 兩老婆	二人女房	………	一二一

本冊子に蒐むるところの歌謡は全篇約百五十篇、その範圍は殆んど我が全土に亘り、その發生を遠く北支中支に持つものも少しとしない。大概は蒐集したつもりであるが、第一民謡とは住民がその土地と共に歌ふものであり、謂はゞ大地の脈搏でもあるので、喧嘆たる原野に殆んど、唯動くものとして終日働き通すやうな農民の口から、春夏秋冬如何なる音韻が流れ出てゐるかは全く蒐集の及ぶところではない。

このやうにして、その數的な完全さは期し得ないのである。しかし乍ら、こゝに蒐め得た諸項目はその生活や人情を寫し得て餘りがないと思ふ。尤も歌によつては古色蒼然たるものもあつて、現代の用にはとても堪へ得ないものが多々あるといふし、音韻の關係で原歌に則しないものがあり、またその題材があまりに實際的なところから歌の喜びを疑はれるものもないと言へない憾みがある。日本のやうに、四界海を遙え、山河草木四時變じて簷にせまるやうな環境そのまゝの觀念ではとても理解どころか興味も起らないことと思ふ。

滿洲の歴史は同一民族の定住といふことがなく、主に開拓に明けられて民心の安けきこともなく、加ふるに統治者の苛政にも甘んじなければならなかつた關係上、民謡等の生れる開日月はなかつたのである。従つてその多くは故郷である山東、山西あたりからの持ちよりなのである。

このやうな流徙の歴史と、空と地平との喧嘆たる原野に、種を蒔き、物を種入れてゐた農民の生活を考へて讀み直すときは興趣は自ら新たなるものがあるであらう。

一、歳時に關するもの

(イ) ◇ 臘 八

臘月八 日子好

許多姑娘變大嫂

嘴裏哭 心裏笑

屁股坐個大花轎

◇ 師 走 八 日

師走八日はよい日でござる

あちらこちらで御嫁入り

よろこびかくして 泣顔づくり

花のお轎に揺られてござる

十二月八日は臘八節で吉日とされ嫁入等が多い。日本でも節句ではないが嫁入は多い。晚餐には臘八粥といふ粥を喰べる。これを喰べると一年中病氣しないとされてゐる。

(ロ) ◇ 辭 意

辭意々々年來到

閨女要花

◇ 禮 神 昇 天

竈王お歸りさあ正月だ

ひすめつ子には花簪

小子要炮

老頭子要個破毡帽

老婆子要雙臭裹脚

伴には爆竹買つてやる

爺さん欲しいはボロ帽子

婆さん要るのは纏足の布

竈王又は竈神は毎年正月元日五更の刻に各家庭に天下り、年末の二十三日に一家の生活状況を書いた報告書を携へて昇天し玉皇に謁して連絡を取るといふ。玉皇は天帝で宇宙を支配する神である。竈崇拜は日本にもある。但し北支満洲ではこの時必ず飴を供へこれを喰べた竈王が玉帝の前でも口が粘つて碌々報告できないやうに仕向けるとは正に絶妙笑殺に値する思ひ付きである。

(ハ) ◇ 竈王爺

竈王爺 本姓張

◇ 竈神

竈の神の御苗字は

張さんとなん申します

骑着馬 背着槍

お馬に跨り槍しよつて
高く高く天さして

上々方 見玉皇

玉皇様に御面會

(ニ) ◇ 賣財神

財門神門 驟馬成群

◇ 財神賣リ

賣の門や神の門

財神到家 越過越發

お庭に家畜は群をなし
福の神様お下りあれば

家はいよいよ御繁昌

財神は福の神、門神は門戸の神。これは大晦日の夜に乞食共が財神の像を家々に賣歩く時の歌である。縁起を祝ふのでどの家でも餘分な心づけをする。

(ホ) ◇ 過年

二十三 竈王上天

◇ 年末

二十三日は竈王のあがり

二十四 寫大字

二十四日は大字書き

二十五 做豆腐

二十五日は豆腐を作り

二十六 吃年猪肉
二十七 殺年雞
二十八 把麵發
二十九 走油
三十 磕頭

二十六日は豚料理
二十七日は雞裂いて
二十八日は饅頭打つ
二十九日は御馳走作り
三十日に皿に盛る

大字とは吉祥の意を含めた文字、之を赤い短冊様紙に書いたものを春聯と言ひ正月各戸門や壁等に貼る。年猪、年雞は大晦日年越しの御馳走にする豚、雞。歳暮の忙しい行事を唄つたものである。

◇ 辨置年

今天二十二
明天二十三
辭皂在眼前

◇ お正月準備

今日は師走の二十と二日
明日はいよいよ二十と三日
竈の神様御歸りだ

糖瓜秤幾兩
黃麵烙幾盤
燒香供神馬
疊鏤化銀錢
奠酒辭了皂
拾掇辨置年
蒸糕用黃米
加棗助味甜
發麵蒸饅々
多々搗幾拳
諸般供養菜
待買上大連
量上幾斗糧

糖瓜は何十匁
饅頭は幾皿
お線香と神馬をお供へ申し
銀紙ひねつて紙錢作り
御神酒もお供へしませう
あとはそろそろ正月仕度
餅にする粟に
棗入れて甘くし
メリケン粉をねかして
よくこねて饅頭
色々なお供物は
いづれ大連に買ひにゆく
何斗か穀物

糶來好使錢
花椒茴香有
就是少粉團
海蜇麒麟菜
蝦米大的鮮
香菌與竹筍
木耳稱幾錢
想着請門神
畫兒捐幾聯
先買對字紙
丹紅砂綠全
花箋共黃表
錫箔不用言

賣つて金にしよう
胡椒もある 茴香もある
支那素麵は僅かで足りませする
水母に麒麟菜
蝦米は大きいの
椎茸と竹の子
木耳は何処
門神は忘れるな
年畫も何枚買はう
先づ春聯の紙買つて
赤や緑も取揃へ
花箋黃表
銀紙は勿論

蠟燭稱幾斤
炸炮買兩盤
要把新年過
衣服都周全
舊歲既辭走
思想也要換
做事和求學
都要認真幹
不良舊沾染
一一要改變

蠟燭は何斤
爆竹を二組
これで正月迎へには
着物揃へにやなりませぬ
舊年はとうに行つてしまつた
心の入れ換へ
仕事に勉強
みんな眞面目にやりやならぬ
よくない習慣も
一々變へよ

辭皂は龜王が昇天すること。糖瓜は普通瓜子と云ひ瓜の種を煎つて砂糖をつけたもの。
黃麵は雜麵とも言ひ饅頭粉に大豆の粉を混ぜて作つた饅頭。神馬は神前に供へる紙の馬。
紙錢も同様。發麵蒸餾々の餾々はこゝでは饅頭をさす。ほんとの餾々は饅頭粉を發酵させ

ないで造るが饅頭は發酵させないと造れない。饅頭は日本のマンチウの餡のないのと同じやうなもの。多々猫幾拳は幾度も手でこねること。茴香はお汁などに入れる香料の一種。粉團は粉條の間違ひであらう。粉條は日本にも近年輸入されてゐる俗に支那素麵である。蝦米は鹽蝦を乾したものの。門神は門の外側へ貼る奏瓊、敬徳の唐代二武將を描いた繪。畫兒は年畫といひ、お正月に壁に貼る繪、別に何の畫と定つたものではない。丹紅砂綠全は赤も綠も揃へるといふ事だと思はれるが、砂綠は綠畫に黃色味を帯びた色。綠の紙は不幸のあつた家しか使用しない。花箋は家の出入口へ貼る色紙で、透して向ふが見えるやう種々な模様にかつてある。色は一定せぬ。錫箔は銀紙の代りに使ふ粗末な銀色の紙。この歌は中國人、滿洲人の家庭の年末の様子が實に細々と唄はれ、土俗學上から見て頗る價値あるものである。

(ト) ◇ 大吉大利

大吉大利
買田買地
大吉到門頭

◇ 大儲け

大儲け 大儲け
田を買はう 畑買はう
福の神が舞ひ込んだ

養猪大如牛
三十斤頭
四十斤油
火腿臘肉掛滿載

豚を飼へば牛のやう
頭だけが三十斤
油だけが四十斤
火腿や塩肉部屋一杯

これも賑やかな歳末風景。この一斤は一疋の半分即ち日本の約百三十三匁。

(チ) ◇ 過年

過年過年
蒸糕煮肉過新年
給你幾塊
甜糕吃
保佑你一年強一年
年々好賺錢

◇ お正月

お正月 お正月
お餅やお肉でお正月
お前にも上げます
甘い餅をおあがり
一年一年出世して
年々お錢を儲けるやうに

これはお母さんとかお婆さんとかが子供に向つていふ口振りである。
蒸糕は粟と玉蜀黍とを半々に混ぜ一晚中水に浸しておいて十分にふやけた所へ、更に水を加へて、豆腐のやうに石臼で磨り、出来たものを釜にかけて蒸して作る。

(リ) ◇ 過中秋

八月十五過中秋

有人歡喜有人愁

有人歡喜吃月餅

有人歡喜吃葡萄

◇ 中秋節

八月十五日中秋節

喜ぶ人もあり困る人もある

月餅好きで喰ふ人も

好きな葡萄の喰へる人もある

中秋節は支那三大節の一つで日本の所謂盆、節季に當り、滿洲に於ても同様上半期の決算期に當るので泣く人も笑ふ人もあるわけである。月餅は中秋節に喰べる菓子。又此の頃は葡萄の出盛る頃。

二、農事に關するもの

(イ) ◇ 二十四氣

立春陽氣轉

雨水融河邊

驚蟄烏鴉叫

春分地皮乾

清明忙種麥

穀雨種大田

立夏鵝毛住

小滿鳥來全

芒種大家樂

夏至小豆拈

◇ 二十四氣

立春頃から氣も浮かれ

雨水にや河邊に氷なく

驚蟄鴉がやかましい

春分くれば地が乾き

清明節には麥を蒔き

穀雨にや高粱大豆蒔く

立夏はそよとも風はなく

小滿にや來ない鳥もない

芒種は家中樂しんで

夏至には忙し小豆摘み

小暑天氣熱
大暑是伏天
立秋忙打靛
處暑動刀鎌
白露齊割地
秋分無生田
寒露割蘆子
霜降菜宜醃
立冬收倉庫
小雪地封嚴
大雪江河凍
冬至不行船
小寒忙買辦

小暑は追々暑くなり
大暑となつたら耐へられぬ
立秋くれば藍が出来
處暑には鎌の手入れして
白露に揃つてとり入れりや
秋分きた頃野は裸
寒露にや紫蘇をとり入れて
霜降りや漬け菜の仕込みどき
立冬くれば庫じまひ
小雪にや地面も凍り出し
大雪くれば河凍り
冬至にや通ふ船もない
小寒きたら何買はうか

大寒就過年

大寒くればすぐ正月

一年を二十四氣に分つて季節を知らしめ農耕の助けとしたもので、立春は陽曆の二月四日節分の明けの日で、陰曆は十二月下旬頃であり一定してゐない。
最新支那語大辭典に、五日を一候とし三候を一氣とするが故に一歳に二十四氣(節)となる云々、とあり。

(口) 晴雨と農事 三十七歌

季節と晴雨、それに対する農作の加減、この周密深刻なる注意は凡そ世界の如何なる農民と雖もこれ以上ではあり得まい。
實際的なあまりに現實的な題材は稍もすると歌といふ感じをなくする恐れがあり、氣持を傳へ得ないのが残念である。

1

清明刮起墳前土

清明節に墓土とべば

莊家老一年白受苦

百姓苦勞は無駄となる

清明節に風があれば早魃がある前兆だといふ意。清明節は三月節としてあるが必ずしも三月ではなく春分から十五日目。植樹節の別名があるが、現今滿洲國ではこれより十五日後の穀雨日に行はれる。

植樹節の別名は、春秋時代に五霸の盟主となつた晋文公が、その忠臣を顧みなかつたことを悔ひ、その通樓の山を焼いて出て来る所を迎へようとした所が、案に相違して母を抱いたまゝ焼死してゐたといふ故事からその忠臣介子推の靈を慰むべく、樹を植ゑ墓參をするのである。

莊家は一構への農家。白は無一物、又俗に故なく等の意。

2

八月初一雨一陣
早到來年五月盡

八月一日一さし降れば
來年五月まで照り續き

八月一日に雨があれば來春は早魃がある前兆だといふ。

3

八月十五雲遮月
正月十五雪打燈

中秋節の月に雲がかゝれば
元宵節には燈に雪かゝる

中秋節は端午と歳暮と並んで一年間の三期清算節となつてゐて、商取引のある所では何を措いても詰勘定を差引精算しなければ、不信用漢とされ次回からの取引に大きな影響を残す。全くお祭り気分、この氣分を味ひたいために、この期節の直前には盜賊が増すと言はれた。

元宵節の燈は天上の諸神を慰めるため徹宵賑やかに點すが、之に謎を書いて賞を出したりする所から、酷寒零下何十度も平氣で人が出る。

4

不怕初一十五下
就怕初二十六陰

朔日十五日一日降りも
二日續けば氣にかゝる

一日の降りが二日まで延び、十五日の降りが十六日まで延びれば其の月には晴天は少な

くなるの意。

5

春雨甲子
赤地千里
夏雨甲子
乘船入市
秋雨甲子
五穀生芽
冬雨甲子
牛羊凍死

春の甲子(きのえね)雨降れば
赤地千里と照り續く
夏の甲子雨降れば
市中に船が浮び出す
秋の甲子雨降れば
五穀芽を出し役立たぬ
冬の甲子雨降れば
牛や羊は凍死する

赤地は旱魃のため草木の枯れ果てた土地。

6

大旱不過五月十三

どんな旱でも五月十五日は通越さぬ。

此の日は雨節と稱せられ、假令旱魃があつても雨が降るとの意。

7

有錢難買五月早
六月連陰吃飽飯

五月早は金では買へぬ
六月降りならうんと喰へ

有錢難買、吃飽飯、何れも豊作を喜んでのことである。

8

七月十五定旱澇
八月十五定收成

七月半からは降らうとまゝよ
八月半は作定め

七月十五日頃は五穀は殆んど生長を遂げてゐる。八月十五日頃には稔つてしまつて收穫も定つてしまふの意。

9

晚霞行千里
早霞不開門

夕曉け見たなら千里ゆけ
朝霞見たなら家出るな

晚霞は夕曉け、翌日晴天の兆。朝霞は朝曉け、かゝる日必ず雨ありといふ。

10

東虹日頭西虹雨
南虹北虹賣兒女

東の虹は晴、西の虹は雨
南北の虹なら兒をかくせ

南虹北虹といふことは殆んどないことである。あつたら大變といふ事だが無いから子を隠さなくともいゝだらう。つまり凶年で子女を賣る程困ることはない。

11

一年兩頭春

年に立春二度あれば

黄土變成金

土も黄金の原となる

春が長くなるからか、或ひは二度作る事が出来るためか、さうなつたら百姓が豊年を喜ぶばかりではない。

12

頭伏蘿蔔二伏菜
三伏種蕎麥

一伏大根二伏菜
三伏來たなら蕎麥を蒔け

夏至後第三庚日を初伏とし第四庚日を中伏とし、立秋後の第一庚日を末伏といふ。(最新支那語大辭典)

13

蕎麥種早子粒稀
蕎麥種晚怕霜欺

蕎麥の早蒔き實は小粒
遅蒔は霜があとろしい

14

稷子處暑不出頭
趕到老秋割喂牛

處暑に稷稻の穂が出なけりや
秋の末には牛の餌

15

過了芒種
不可強種

芒種節過ぎたら
無理な植ゑ方するな

16

前不栽楊
後不種柳

楊樹植ゑるなら山の後
柳樹植ゑるなら山の前

楊は陰を好み、柳は陽を好む。

17

老雲接駕
不刮也下

日の入り際に雲出たら
明日にはきつと降りとなる

不刮は風吹かず。下は降る。

18

魚鱗斑 不過三
猪耍歡 不過三

雲の形が鱗の様になれば三日經たずに降
りとなる
豚が喜びはしやいでも三日の中に降りと
なる

19

穀雨前後
栽瓜種豆

穀雨前後は
瓜をまけ豆を蒔け

穀雨は前掲二十四氣の中、陽曆四月二十日、又は二十一日、穀雨種大田と謂はれて主要

穀物を種蒔きする時である。

20

收花不收花

單看正月二十八

棉が收れるか收れないか

正月二十八日の天氣で解る

21

早時東風難下雨

澇時北風無晴天

早りに東風雨とはならぬ

降りに北風晴はない

22

二月清明麥在前

三月清明麥在後

二月清明麥はその前に

三月清明麥はその後に

麥在前、麥在後は、前に播け後に播けの意。

23

夏至東風搖

麥子順水撈

夏至に東風吹く時は

麥は濕つて實にならぬ

麥子は麥の實。撈は水中より掬ひ上げる。

24

五月初一龍掉淚

新的到比陳的貴

五月一日龍の泣く雨は

新穀に舊穀の値を凌がせる

新穀は舊穀より高値になるとは不作をいふ。

25

正月三個卵

處々豆苗好

正月卯の日が三つ重なれば

何處の大豆の苗もよい

26

雷打清明前
窪地不種田
雷打清明後
窪地種黃豆

清明節前雷あれば
窪地に五穀の種まかず
清明節後に雷あれば
窪地に大豆の種をまく

高粱、玉蜀黍に比較して大豆はあまり早熟を嫌はないから。

27

五月大
瓜茄剩不下
五月小
瓜茄吃不了

五月の月が大なれば
瓜や茄子は稔りがない
五月の月が小ならば
瓜や茄子の當り年

剩不下は残らない、ないの意。吃不了は喰べきれないの意。

28

先下牛毛無大雨
後下牛毛不晴天

降り出し小雨に大雨降らず
終ひの小雨は晴れ難い

牛毛とは細かいもの、九牛の一毛など言へばあまりにも少いこと。

29

月亮毛烘々不下雨就起風

月の表が毛深く曇りや雨とならねば風が吹く

30

早看東南 晚看西北

朝は東南日暮れは西北 雲があつたら雨となる

下とか下雨とかなくとも通ずる程である。

31

立夏刮東風

立夏に東風吹くときは

必定禾頭空
黃豆不結莢
小豆胎兒瞎

五穀はきつと空頭
大豆は莢を結ばずに
小豆も腹子がふくれない

立夏に雨がないう時は其年は早魃で收穫皆無であるといふ意。

清明不斷雪
穀雨不斷霜

清明節にまだ雪降れば
穀雨になつても霜がある

前掲ながら清明節は春分から十五日目、穀雨は陽曆四月二十、二十一日に當る。

春耕早一日
秋收早十天

春耕一日早目にすれば
秋のみいりは十日違ふ

孤雷不過三
過三十八天

一つ雷三日中に降りがある
三日降らなきや十八日間は降らぬ

當天下雨當天晴
三日以後還找零

雨降る當日降らないと
三日後にはまたあつり

降ると決つた日に降らないと三日後にまた降るの意。

月芽仰
糧食漲
月芽歪
糧價衰

新月が仰向けば
糧價は高くなる
新月が斜なれば
糧價は安くなる

月芽は月牙に同じく新月、三日月をいふ。糧價騰る時は不作の時である。

37

水缸穿裙山戴帽
螞蟻尋鄉蛇過道

水囊袴穿き山が帽子冠り
蟻が穴探し蛇が道越せば
(近く大雨あるしらせ)

水缸穿裙は甕の周りに水玉のつくこと。裙は裙子で女學生のスカート様の飾り袴であるが今日あまり見られないやうである。

(ハ) ◇ 實々忙

你媽在家做什麼
實々忙 實々忙
一饊餅子一饊湯
你嫂在家做什麼

◇ 忙しい忙しい

阿母家で何してる
あゝ忙しい忙しい
餅子作つたり汁つくつたり
嫂家で何してる

實々忙 實々忙
十雙小鞋沒做上
你姐々在家做什麼
實々忙 實々忙
十個花瓣沒做上
你哥々在家做什麼
實々忙 實々忙
領着木匠打櫃箱
你爹在家做什麼
實々忙 實々忙
領着瓦匠做院牆
你妹々在家做什麼
實々忙 實々忙

あゝ忙しい忙しい
十足の鞋がまだ出来ぬ
姉さん家で何してる
あゝ忙しい忙しい
花の刺繡が十まだできぬ
兄さん家で何してる
あゝ忙しい忙しい
大工監督箱づくり
お父つさん家で何してる
あゝ忙しい忙しい
左官監督塀づくり
妹家で何してる
あゝ忙しい忙しい

抱着孩子搖鈴鐘

赤ん坊抱いて鈴ガラ〜

これは多分正月前かお祭前の農家の忙しさを歌つたもので、嫂が鞋をつくり、姉さんが花の刺繡をしてゐるのや、父兄が家の修理をしてゐるのがそれを物語る。一錢の錢は鍋のことである。昔は死刑に用ふる釜を鼎錢と言つた。鼎錢甘始館などいふ。鞋は短いもの、靴は長いもの。

(二) ◇ 五月天

五月天 六月天

那有閑人在路邊

人々都有一把秧在手

口唱山歌不怕天

◇ 五月

五月 六月にや

路傍に遊ぶ者はない

みんな手に手に苗持つて

山歌唄つて畑に行く

五月六月の忙しい農繁期の農村情景である。口唱不怕天は、口々に山唄を唄つて天候などは意に介しない意。勤勞農民を描いた代表的民謡の一つ、滿洲を中心として中國全土に唄はれた。

(ホ) ◇ 耕田歌

牛兒在前吾在後

跟了牛兒朝前走

牛兒不肯走

拿了鞭兒向牛趕

牛兒牛兒不要懶

耕了田兒好吃草

牛兒向我笑

鞭兒不要拿吾願向前跑

牛兒好 不打自會跑

轉灣角上有棵草

牛兒吃了雙脚跳

不多一會田耕好

◇ 耕し歌

牛は前、わたしは後

牛が進めばわたしも進む

牛が進まにや

鞭を取つて叩く

牛よ牛よ怠けるな

田耕ひ出来たら美味い草喰はず

すると牛どの見て笑ひ

叩かんでおくれよいま歩きますよ

牛は賢い叩かんでも歩く

廻り角にある草めあて

喰べて牛つこびよんと跳ねた

牛よ暇どらんでまた耕かうぜ

牛兒真々好
牛兒好 幫助農人真不少
早晨耕去耕到晚
不喊一聲苦惱
牛兒真々好

牛はほんといの家畜
牛はほんといに爲になる
朝早くからおそくまで
一聲弱音を吹きもせず
牛はほんといよの家畜

朝前走は向前進。雙脚跳は喜んでゐる姿。不要職は不要懶、臘は師走、また祭の名。不
多一會はあまり暇とらず。

◇ 貧農歌

鴉鵲歌 鴉鵲歌
農夫實在苦
一家人口五六個
分利人居多

◇ 貧農の歌

鳩がなく鳩がなく
百姓はほんといに辛いな
家にや家族が五六人
脛噛りが多すぎる

種棉種稻日々勤
衣食缺少無人補
苦農夫 日難度
還要債債完留些哺

棉を植ゑ稻を植ゑ日々勤めるが
暮しは少しも樂にならない
百姓は辛い その日暮しもむづかしい
借金拂つたら爪の垢ほど残つた

これは江蘇地方のもので棉は滿洲では奉天以北は殆んど作らない。小農民の僞らない、
而もどうすることも出来ない實情そのまゝを唄つたものである。

(ト) ◇ 郷裏老

郷裏老 背稻草
跑上街 買葦菜
葦菜買多少
放在眼前找不到

◇ 田舎のおつさん

田舎のおつさん藁しよつて
町へでかけて肉買った
肉はいくらときいたらば
眼の前に置いても見えぬほど

葦菜は魚や肉等生臭物をいふ。

(子) ◇ 豊年樂

五穀豊登莊家忙
軋子打
木楸揚
簸箕撮
口袋抗
抗到磨房推
篩揚
推的白面雪花白
蒸的大餅々
老的不敢吃
小的不敢嘗
留着大餅々好上梁

◇ 豊年の楽しみ

豊年だと百姓は忙しい
軋子で挽き
木楸で投上げ
唐箕でふるつて
袋に入れて擔いで
白場に行つて挽いて
篩にかけて
雪のやうな粉にして
大餅々をつくる
老人も喰はない
子供も喰はぬ
残した餅々は棟上げに

軋子は普通碾子といひ、柄のついた石のローラのやうなもので馬に挽かし粟、高粱、豆類などを幹から落すもの、日本の稻扱と同じ用途のもの。木楸は木製のスコップのやうなもの、扱いた穂を高く投げ上げ風を利用して穀と殻實とを分ける。磨房は挽臼のある部屋か小舎。

白面は白麵。餅々は饅頭粉や粟を蒸し棗などを入れた一種の菓子で、一輪車に餅のやうに延して載せ大道で切賣りをしてゐる。留着大餅々好上梁は、豊年で家の建換へをするのでその時の大工左官などを待遇するため誰も喰へずに貯へ置くといふのである。

三、人生的なもの

その徹底したものゝ見方、何物をも氣兼ねしないその表はし方など所謂大陸的なその心臓には、殆んど追いつけないものがある。

(イ) ◇ 人生

早走西 晚走東
人生好似採花蜂

◇ 人生

朝から晩まですたこら働き
人生は蜜蜂に好く似てる

採得百花成蜜後
到頭辛苦一場空
妻也空 子也空

百花の蜜を集めた後に
結局苦勞は水の泡
愛しい妻も空なもの

黄泉路上不相逢
金也空 銀也空
死後何曾在手中

可愛い子供も空なもの
あの世の路でも逢へやせぬ
金も銀も空なもの
死んだら手の中何残る

滿洲人は謂ふ——悲觀はいかぬ、樂觀もいかぬ、悲觀したら立てぬし、樂觀したら危
い、須らく達觀を要す、と。かうして喜びもなく憂ひもなく屹々として金を蓄めることを
努めてゐる彼等の心は測り難いものがある。

(口) ◇ 棺 材

天是棺材蓋
地是棺材底

◇ 棺

あを天井は棺の蓋
廣い大地は棺の底

逃出千萬里

千里萬里を逃げるとも

仍在棺材裏

やつぱりゐるのは棺の中

日本人が初めてこれを読んだら膽を潰すかも知れない。けれども悲觀も樂觀もないといふ滿洲人にはこれも達觀の心境である。即ち、人間到處有青山と力づけになる歌である。棺材は棺、柩で、餘裕ある家では六十歳に達すると自分なり子孫なりが生前立派な棺を準備し、自宅または附近の廟に預託しておく。中産階級で先づ四五十圓から百圓、上は限りなく數百、數千圓を惜まず、その重量も二十貫から數十貫——之を觀れば、百姓が、限らない天を棺材の蓋とし、果しない地を棺材の底とし、而も之を耕し之に枕するを想へば、歌の心も亦俄然色めき立つことであらう。

(ハ) ◇ 乞 人

我要我的飯
你看你的家
可恨勢利狗

◇ 乞 食

己は己の飯を乞ふ
君は君の家を守る
權勢に阿附する憎き犬

單咬破衣衫

どうして襤褸着りや吠えるのだ

天を棺材の蓋、地を棺材の底とする氣持は善かれ悪しかれ漢民族の民族性である。乞食が平身低頭するのも一つの面子で、之を汚されば犬に對してさへ恨みを發するのである。

四、愛憎に關するもの

(イ) ◇ 一身同體

你儂我儂
忒殺情多
情多處熱似火
把一塊泥
捻一個你
塑一個我

◇ 一身同體

お前とわたしと
死ぬほど惚れて
心燃えるよ火のやうに
一塊の土とり
お前一人造り
わたし一人造り

將咱兩個
一齊打破
用水調和
再捻一個你
再塑一個我
我泥中有你
你泥中有我
我與你生同衾
死同一個槨

そして二つを
一しよにこわし
水でこねつて
またお前を造り
わたしを造ろ
わたしの泥ん子の中にお前があり
お前の泥ん子の中にわたしがある
二人は此の世で添ひ遂げて
死んでも離れぬ比翼塚

(ロ) ◇ 大姑娘

大姑娘 沒有丈夫
怨爹娘

◇ 大きなねえさん

大きな娘さん まだ嫁つがぬ
父さん母さんあんまりだ

那天晚上做個夢
夢見生下個小乖乖
漂白的臉
通紅的腮
黑黑的頭髮
俊乖乖
叫了環
你上街
買個包袱包起來
深々の坑
淺々の埋
一等你娘有靠身
再住三年再回來

或る晩わたし夢を見た
夢でわたしは子を産んだ
色白な
赤い頬
髪黒い
男の子
女中を呼び
お前街まで一走り
襦袢買はしてよく包み
深く坑を掘り
浅く埋め
もし少しお待ちよ婿さんができる
三年経つたらまた宿つておくれ

小乖乖は嬰兒、俊乖乖は男の子。漂白は雪白。了環は子供の時買はれた一種の女奴隷。一等你娘有靠身、一等は暫く待て、有靠身は、身を委す人が出来る、つまり夫が出来る意。

(ハ) ◇ 打牙牌

姊在呀房中呀打牙牌
忽聽門外才郎來
雙手把門開
噯噯呀啊
雙手把門開
天牌呀地牌呀奴不愛
只愛人牌抱在懷
跑進奴房來
噯噯呀啊

◇ ヤーバイ遊び

姐さん部屋で牙牌遊び
門外に男の聲がする
兩手をかけて門あけた
アイアイヤア
兩手をかけて門あけた
天牌もいや地牌もいや
人牌だけを抱きしめたい
走つて行つて部屋に通した
アイアイヤア

跑進奴房來

走つて行つて部屋へ通した

牙牌は三十二枚の牌で麻雀に類する遊び道具。この歌は滿支にかけて廣く唄はれてゐる。

(二) ◇ 侑尼僧

一更裏 侑尼僧 進庵堂
手拿著念珠兒 眼淚汪汪
青春削髮 眞個苦
正在那青春 不配少年郎
怨了一聲爹 罵了一聲娘
太不該 將女兒送進庵堂
天天 要念觀音經
夜々の思想 那年少美才郎
二更裏 侑尼僧 甚悲傷

◇ 美人尼さん

きれいな尼さん御堂に詣り
珠數を手にして泣いてます
うら若い身で髪を切り
男に添ふことなりませず
父さん母さん怨みます
お寺にやるとはひどいです
日毎守りの觀音經
夜毎男を思ひます
夜ともなれば悲しみたへぬ

想起那姊妹們 對々成雙
穿紅著綠 廳堂坐
手抱著小孩子 叫聲雙親娘
留起烏雲髮 方把願來償
還思想尋配 那美貌才郎
頭上 鮮花載幾朵
如意的金釵呀 常插頭兩旁

思へば姉妹みな夫婦づれ
きれいな着物で座敷に坐り
抱いた子供に父よ母よと呼ばれます
あゝ黒髪を伸ばしたい
きれいな男を夫に持つて
きれいな花で髪飾り
金の簪兩側に挿したい

(ホ) ◇ 孟姜女

一、正月梅花是新春
家々戸々點紅燈
別家丈夫團圓聚
我家的丈夫去造長城

◇ 孟姜女

正月梅花是新春
紅いともしをかけならべ
よそは夫と仲睦まじい
あたしの夫は長城造る

二、二月杏花暖洋洋

雙々燕子到南牆

燕窠修得端々正

對々成雙歇畫梁

三、三月桃花是清明

桃紅柳綠正當景

家々墳上燒白紙

孟姜女墳上冷清々

四、四月薔薇養蠶忙

姑嫂雙々去採桑

桑籃掛在桑樹上

擦々眼淚勒把桑

二月は杏花暖かく

夫婦燕が飛んで来る

形正しく巢をかけて

夫婦離れず畫梁で休む

三月桃花清明節

桃に柳の四方の景

他家は連れ立ち墓詣り

孟姜の墓のうら寂し

四月薔薇咲き蠶も太る

女は揃ふて桑を摘む

籠をぶらりと木にかけて

一葉摘んでは涙拭く

五、五月柘榴是黃梅

黃梅發水落下來

家々田中黃秧栽

孟姜女田中草成堆

六、六月荷花熱難當

蚊虫飛來叮胸膛

專可吃奴千口血

莫叮奴夫萬喜良

七、七月鳳仙七秋涼

家々窗前裁衣裳

青紅藍綠都做到

孟姜女家中是空箱

五月は梅が黄に熟れる

梅が色づきや雨が降る

何處の家でも田植をするが

孟姜の田は草ぼうぼう

六月は蓮、暑苦し

蚊さへ惱みの胸を螫す

わたし螫さうとまゝなれど

螫すな夫の萬喜良

七月鳳仙そよ涼し

戸毎窓邊でお裁縫

色とりどりにでき上る

孟姜何を縫はうやら

八、八月木犀雁門開
孤雁足下帶書回
閑人只說程人話
那有人兒送衣來

九、九月菊花是重陽
重陽美酒菊花香
滿々斟杯奴不喝
無夫飲酒不成雙

十、十月芙蓉稻上場
牽犂磨稻納官糧
家々都有犂來牽
孟姜女家中是空倉

八月木犀雁來る時は
脚に手紙をつけてくる
それは昔の嘘の皮
誰が着物を持つてくる

九月九日菊節句
菊のさかもり菊の酒
よしやどんなにすゝめても
夫なき妾や飲まりようか

十月芙蓉稻を刈り
臼で靱磨り上納をさむ
戸毎戸毎にその靱磨るに
孟姜の家は何を磨る

十一、十一月水凍雪花飛
孟姜女千里送寒衣
前面烏鴉來領路
哭倒長城好慘凄

十二、十二月臘梅過年忙
殺猪殺羊鬧洋々
家々都有猪羊殺
孟姜女家裡空堂々

十一月は雪が降る
孟姜遙々衣持つて
鴉先導で來たなれど
泣いて長城を溶き崩す

十二月臘梅すぐ正月
家畜殺せばぎやあぎやあと
鳴かさぬ家はどこもない
孟姜の家は唯佗し

孟姜女モンヂヤンニユイの歌は概して長江沿岸及びその以南で胡弓に合はして唄はれてゐるが、種類も
多く、また、劇などにも仕組まれ支那民謡の王座を占むる觀がある。
孟姜女とは今から二千六百年前の一女性で神話化された歴史的人物である。即ち左傳の
杞梁の妻で、齊侯と共に莒を攻めて戦死した夫杞梁をかなしんで齊侯の慰めも受けずに泣
いて死んだといふ。左傳（襄公二十三年傳）には彼女の哀悼の様は書いてないが、左傳か

ら三百年後の孟子中の淳于髡の一節には、華周杞梁の妻夫を慕ひてよく泣き、而して國俗變ずとあり、また韓詩外傳卷六には杞梁の妻悲み泣き、人稱して詠ずとあるを見ても當時如何に人氣があつたかがわかる。また烈女傳卷四、貞順傳には、齊侯が莊公となつてをり彼女は夫の死地を慕つて泣き、爲に城廓一角を泣き崩した。そして遂に淄水に投じて死んだといふ。それから、次いで唐代に入るとこれが秦代の人になり、萬里長城苦役の擧句、ここに埋られた夫を慕つて泣き爲にその一角を崩したところが夫の白骨が現はれたといふのである。これが事實としても信じられ、長城の東端、山海關には孟姜廟、孟姜塚がある。左傳とはあまりに隔りがある。

一月、紅燈は正月に門口に吊す一種の花燈籠のこと。この歌は北京や滿洲でも唄はれてゐるが、二月に燕が來るとあるから、福建か廣東か多分南の方であらう。二月、畫梁は支那滿洲の家屋では梁に採色をしてあるからかくいふ。五月、家々田中黃秧栽は田植と譯したが、支那滿洲の田は畝である。八月、雁門開は萬里長城に雁門といふ門があるのをいふ。八月木犀が咲き涼しい風が吹き初めると、雁が長城を越えて南へ翔び去る意。

五、姑、小姑に關するもの

大家族主義の傳統と無理解な結婚からさまざまなものが生ずるのである。日本などには見られない所が多い。

(1) ◇ 新媳婦

車輪菜 遍山野
南山住個劉二姐
梳油頭 戴紅花
騎着毛驢上媽家
媽々出來接女兒
爹々出來抱娃々
哥々出來扭一扭
嫂々出來扭一扭
不用扭 不用扭
不吃你的飯
不喝你的酒
當天來 當天走

◇ 新嫁さん

車輪菜 遍山野
南山に住む劉姐さん
髪には香油紅い花
驢馬に揺られて里歸り
母さん娘を出迎へりや
父さん赤ちやん抱いて取る
兄さん出て來てちよつと睨み
嫂さん出て來てちよつと捻る
何よ睨んだり捻つたり
あなたの御飯は喰べやせぬ
あなたの御酒は飲みやせぬ
わたしは今日來て今日歸る

媽々說炕裡坐
嫂々說炕蓆破
爹々說炕沿坐
嫂々說炕沿破
哥々說板凳上坐
嫂々說板凳腿少一個
媽々說 去買肉
嫂々說 錢不够
爹々說 去買麵
嫂々說 錢不便
哥々說 去打油
嫂々說 油壺漏
小二姐 告辭走

母さん炕にお坐りと
嫂さん炕の蓆は破れたと
父さん炕の邊にお坐りと
嫂さん炕の邊も破れたと
兄さん腰掛にお坐りと
嫂さん腰掛は脚三本
母さんいふのに肉を買つてこい
嫂さんいふのに金足らぬ
父さんいふのに麥粉買つてこい
嫂さんいふのに金の都合が悪い
兄さんいふのに油買つてこい
嫂さんいふのに油壺が漏れる
劉姐さんは暇乞ひ

媽々問 幾時來
從今無事我不來
爹々死 穿孝來
媽々死 披頭來
哥々死 墳前燒張紙
嫂々死 墳前拉坡屎

母さんいつまた來るかときけば
用が無いからもう來ない
父さん死んだら喪服できます
母さん死んだら髪といてきます
兄さん死んだら紙錢燒いてあげましょ
嫂さん死んだら墳にいたづらしてやる

・孝は喪服、披頭は髪をほどくこと、喪のしるし。張紙は弔紙、紙錢とも言ひ錢形を捺した紙で法事や葬式の際に焼く。

(口) ◇ 回 門

月亮地 明光々
女兒回家看望娘
娘叫心肝肺

◇ 里 歸 り

月亮地 明光々
嫁さんいそいそ里歸り
よう來なすつたと母さんは可愛がる

爺叫百花香
哥々叫我親妹子
嫂々叫我鬧家王
開米櫃吃爹的
開箱櫃穿娘的
不吃哥々家常飯
不穿嫂々嫁裝衣
哥々說去買麵
嫂々說錢不便
哥々說去打酒
嫂々說錢沒有
哥々說去買肉
嫂々說錢不鈔

きれいになつたと父さんはほめる
實の妹と兄さんはよろこぶ
うるさい奴が來たと嫂さんはいやがる
米櫃を開いてお父さんの米をくふ
葛籠開いて母さんの着物着る
兄さんの御飯は喰べやせぬ
嫂さんの着物は着けはせぬ
兄さん麥粉を買はうと言へば
嫂さん言ふのに金の都合が悪い
兄さんお酒を買はうと言へば
嫂さんお金がないといふ
兄さん肉を買はうと言へば
嫂さん金が足らぬといふ

哥々說蒸饅首
嫂々說煮白粥

これには類歌がたくさんあるが略すことにする。

兄さん饅頭を蒸しませうと言へば
嫂さんは粥を煮ませうといふ

(ハ) ◇ 女兒想娘

小々鶏 遍身黃
那個女兒不想娘
想起娘來無處去
關起門來哭一場
雖說公婆待我好
那趕自己親生娘

◇ 母を戀ふ

小々鶏 遍身黃 (次を起す序語)
どんな娘も母さん想ひ
母さん想へば遺瀨ない
門を閉してひとり泣き
舅姑よくしよとても
産みの母には及びやせぬ

(ニ) ◇ 新媳婦

棗樹開花歪歪類

◇ 新嫁さん

棗樹開花歪歪類

俺媽生下俺自個
懷揣々 懷抱々
一氣邁到小沙河
小沙河 十二個公
十二個婆 十二個小叔
管看我 給我水桶去打水

井又深 繩又細
勒得小手怪痛的
低々頭 搗々腰
望見娘家柳樹梢

柳樹梢上有黃雀

わたしの母さんわたしを産んで
だつこおんぶでいたわり育て
遂に小沙河へお嫁にやつた
舅も多いし姑も多い
それに小じうとたくさんあつて
みなでわたしを看視する
水桶持たされ水汲みにゆけば
井戸は深いし繩は細いし
わたしの小さな手はしめられて
痛くて痛くて叶ひやせぬ
頭うな垂れ腰打ちながら
里のお家の柳を見やりや
柳の枝に雀があるよ

十二個公十二個婆……の十二は数の多いことを示す。箱入娘で育てられて、複雑な家庭へ嫁入りし苦勞してゐる氣持を唄つたもの。最後の方の叙景が、滿洲民謡としては珍らしく利いたものである。

(木) 雁々

雁 雁 等々我
咱倆適跟拾柴禾

拾到晌午過
咱倆坐那比公婆

你的公婆還好些
我的公婆光打我

◇ 雁

雁よ雁よ待つてくれ(序語)
わたしら二人で薪採り

お晝過ぎまで採つてから
舅姑の比べつこ
あなたの舅姑は

まあまあ幾らかいゝ方よ
わたしの舅姑は
毎日わたしを叩きます
父さん母さん怨みはせぬが

不怨爹不怨娘
都怨東邊老黑子

吃我的蒸包
喝我的疙瘩湯

叫他的嘴上長個大疔瘡

蒸包は豚まんじゆう、疙瘩湯はうどん汁、仲人口に乗せられた嫁の口惜しまぎれのうた。

(へ) ◇ 住老娘家

小公雞彎々爪
從小好住老娘家

うらめしいのは媒介者
隣の黒んぼをやぢ

なかうど顔して毎日來ては

うちのまんぢゆうむしやむしや喰つて

大きなお椀でお汁をすゝる

ほんとに憎いあのをやぢ

口のまわりに大きなおでき

◇ 祖母さんところ泊る

小公雞彎々爪(序語)
わたし小さい時から

お祖母さんのお家好き

舅々來搬我

舅々你坐下

我到厨房去烙餅

烙個圓上圓

拍打拍打一大盤

舅々你吃吧

我到繡房去打扮

穿上衫兒

繫上裙子

脖子上帶個大雲巾兒

問道婆々多嚙回來

婆々道

天也短

おぢさん迎へにきて嬉しいわ

おぢさんお掛け

わたし御馳走いたします

まんまるに餅焼いて

皿へばたばた積み重ね

おぢさん如何でございます

わたしお化粧して参ります

着物打掛け

飾袴穿いて

肩に襟巻 お姑さんにお伺ひ

何時歸つて参りませう

お姑さんのいふのには

日は短かいし

道也遠

那個閑事我不管

道や遠い

そんな遊び事知るものか

烙餅は、メリケン粉をこねて鍋に油をひいて焼いたもの。拍打拍打は擬音、繡房は閨房で女の部屋。舅々は母の兄弟で、父の兄弟は伯父叔父。この歌は可愛い孫の嫁入先へ祖母がおちさんを迎へによこしたもので、嫁が喜んで身装ひをして姑にお伺ひを立てるところ。

(ト) ◇ 親家母

巴狗兒 你看家

我上南園採棉花

兩壟棉花沒採了

小狗家裡汪汪咬

咬誰哪

咬親家

◇ 嫁の母

ボチよ留守番しておくれ

わたし畠へ棉採つて來う

二壟棉を採らんうち

ボチがわんわん吠え立てる

誰に吠えたぞ

嫁の母御に吠えた

親家親家上炕裏

有句好話告訴你

那丫頭不知禮

踏着板橙拘篋子

叭鳴々々放兩個屁

叫我那會不生氣

お母さん來ましたかお上んなさい

話色々ございます

あなたの娘さん禮知らず

櫛を取ると踏台ふんで

プツプツお屁を二つした

わたし怒らんで居られうか

了頭は娘のこと、日本の、あまつちよと言ふ様な悪い意味。親家は婿の親と嫁の親とが相互に、お父さん、お母さんと呼ぶに使ふ呼稱である。拘篋子の拘は手を伸して取る。篋子は櫛。

(チ) ◇ 青翠墜

青翠墜 綠翠墜

聽我說嘴解々悶

我是爹々の順氣丸

◇ 翠の耳飾り

青翠墜 綠翠墜(序語)

聽いておくれよわたしの胸を

あたしや父さんの順氣丸

我是媽々の小寶貝
我是哥々の小妹々
我是嫂々の胡攪棍
攪棍生一回氣
攪棍生一回氣

あたしや母さんの寶物
あたしや兄さんのいゝ妹
あたしや嫂さんの大邪魔物
くやしいぢやありませんか
くやしいぢやありませんか

これは小生意氣な小姑を唄つたもの。

説嘴解々悶は胸中のむしやくしやを喋るといふ意。順氣丸は藥名。胡攪棍の胡は目茶苦茶、攪棍は摺小木、搔き廻す。生氣はむつとすること。

六、結婚に關するもの

イ、嫁入り

1. ◇ 花々轎
花々轎八人擡

◇ 花々轎
花で飾つた嫁入り轎は

擡進府門來
哥々背我上花轎
嫂々送我眼淚拋
敲大鑼放大炮
鳴々打々好熱鬧

八人に擔がれ門に來る
兄さんわたしを負うて轎へ乗せ
嫂さん見送り泣いてゐる
銅鑼を鳴らして爆竹揚げて
ぢやんぢやんばんばん賑やかだ

花嫁が生家を出發する光景で、兄が妾を負ふて轎へ乗せるとあるのは、その地方の一風俗が唄はれてゐるので、浙江省の同種の歌には、兄が妾を抱いて乗せるとある。

2. ◇ 女上轎

女兒上了花々轎
親娘囑咐兩三場
你在人家做媳婦
不比娘家做姑娘

◇ 嫁入り
娘が轎に乗つた時
母はくどくど吩咐ける
お前かたいよいよ嫁づくと
娘時代と違ひます

早々起 快梳妝
梳拾完了開門窗
籠裡鷄兒快些放
堂前地 要掃光
掃後再掃爹娘房
茶滾先送爹娘喝
爹娘不喝你莫喝
飯熟先送爹娘嘗
爹娘不嘗你莫嘗
小姑小叔好扯謊
你待他們要溫良
果能件々都照辦
你娘臉上纔有光

朝は早起き髪梳いて
それがすんだら戸窓あけ
籠の鷄早く出せ
家の表を綺麗に掃いて
舅姑の部屋掃除
お茶が沸いたら親御に上げよ
それより先にお前は飲むな
御飯出来たら親御にあげよ
それより先にお前は食ふな
小舅小姑はいろいろいふが
お前は彼等に優しくなさい
このこまごまが守れたら
姑さんも定めし顔よからう

花々轎は輿入れの駕籠である。満洲は駕籠の所もあり荷馬車にあんべらで屋根をつくつて紅幕で包み、この花轎の代用をさす所もある。しかし近時大連、奉天、新京等の都會地では、紅い飾布をかけた自動車で手輕に済ましてしまふものもある。これは、いよいよ嫁入りする轎に乗り込んだ娘に母親が名残り惜しく細々と訓へるところである。

3. ◇ 開々箱

開々箱 開々箱

簞笥長持開いてごらん

大紅褥子 大紅被

紅いふとんが入れてある

轟 轟 放大炮

外で打出すお祝ひの

爆竹ぼんぼん鳴り出せば

姑娘下一跳

嫁さんびつくり驚いた

媽々哭的懷中抱

母さん泣き泣き抱きしめる

爹々帶的抱上轎

父さんお轎へ抱きあげた

箱を簞笥長持としたが、人一人寝られる程の葛籠に牛皮を蔽したもので、白、又は彩色

し、家紋を描き込んだりしたもので、普通安い時で、二十圓から百圓止まり。木箱を使ふ家もあるが何れも二個。最後の節中、帯的は忙的の方よしといふ。

口、未 婚

1. ◇ 大雪紛々

大雪紛々

足凍氷冷

告我岳父岳母

早完婚姻

◇ 大 雪

大雪紛々降つてきた

足が冷めたい氷のやう

あの子兩親に言つてやる

早く結婚させるよに

2. ◇ 小々子兒

小々子兒 坐門墩兒

◇ 少 年

男の子供が門台で

坐つてあいあい泣いてゐる

哭著喊著 要媳婦兒

嫁さん欲しいと泣いてゐる

要媳婦兒 做甚麼兒

吹燈做伴兒 點燈說話兒

嫁さん貰つてどうするの

ランプ消して伽させる

ランプつけて話する

做鞋做襪 做衣做掛兒

鞋をつくらせ鞋下縫はせ

着物、ちゃんちゃんこを作らせる

3. ◇ 恨生姑娘

小三姐

十八啦

三根頭髮披肩啦

◇ 娘を生んだ恨み

三番目の姉さん

十八になつた

髪が三本肩まで伸びた

(そこで親たち周章て出し)

東街裏染紅布

西街裏染綠裙

東の町では布を紅く染める

西の町では裙を綠に染める

打發三姐快出門

爹踪脚

娘拍手

不如從小喂了狗

早く嫁ぐ様に三姉さん急がす

お父さんは地團駄

お母さんは手を打つて

小さい時分に犬にやりやよかつた

4. ◇ 媽媽糊塗

大清國來太平初

時興起姑娘想丈夫

媽媽娘你好糊塗

哼々啵々啲

媽媽娘你好糊塗

東莊妹妹他倒小

白光々的小孩懷抱着

◇ 母さんの馬鹿

大清國來太平初（單なる序語）

ハイカラ姉さん夫が欲しい

母さんお前はぼんやりね

ハン ハン アイアイヨ

母さんお前はぼんやりね

東村の妹は年下なのに

可愛い、赤ちやん抱いてゐる

媽媽娘你好糊塗

哼々啵々啲

媽媽娘你好糊塗

母さんお前はいゝ馬鹿ね

ハンハンアイアイヨ

母さんお前はいゝ馬鹿ね

以下略

民國四五年頃、主に人力車夫などによつてしきりに唄はれてゐたものである。

5. ◇ 姑娘十想

一想二爹娘

爹娘好心腸

孩兒親事全在你主張

怎不買嫁裝

怎不買嫁裝

二想奴公婆

◇ 娘の怨

一つとや

父さん母さんお人好し

子供の嫁入りあなた委せ

どうして支度をしてくれぬ

してくれぬ

二つとや

公婆有差錯
男大女大夫婦該配合
怎不來娶我
怎不來娶我
三想說媒人
媒人好良心
兩家親事全在你一人
怎不來問々
怎不來問々
四想奴的哥
比奴大不多
去年三月就把親事過
二人真快樂

舅姑さんもあんまりぢや
息子も娘も年頃よ
どうして貰ひに來てくれぬ
來てくれぬ
三つとや
媒人さんもいゝ人だ
兩家の縁談あなた委せ
どうして都合をさゝに來ん
さゝに來ん
四つとや
兄さんといくつも違はない
去年三月結婚し
二人はほんとに楽しさう

二人真快樂
五想奴的嫂
和奴一般高
小嬰孩就在懷中抱
越想越心焦
越想越心焦
六想奴的妹
比奴小兩歲
姑娘小爺成雙又成對
越想越掉淚
越想越掉淚
七想奴的郎
南學念文章

楽しさう
五つとや
嫂わたしと背もおなじ
赤ちやん産んで抱いてゐる
思へばじれつたい
じれつたい
六つとや
妹は二つも小さいに
とつくに嫁かたづき見せつける
思へば涙がこぼれます
こぼれます
七つとや
夫は南の學校です

上學下學路過俺門上

叫奴胡思想

叫奴胡思想

八想奴的房

好像一廟堂

清晨掃地晚上又燒香

叫奴真悲傷

叫奴真悲傷

九想奴的牀

牀上掛蚊帳

只見鴛鴦不見奴的郎

越想越心慌

越想越心慌

學校の往復に門前通る

見れば心が狂ひさう

狂ひさう

八つとや

わたしのち部屋は寺お宮

朝は庭掃き夜は線香

ほんとにほんとに悲しいよ

悲しいよ

九つとや

寢床にかゝつた蚊帳見れば

模様は鴛鴦夫見えぬ

思へば思へばじれつたい

じれつたい

十想奴命相

命相真不强

不如一命碰死見閻王

不受這幾場

不受這幾場

十とや

わたしの運勢悪すぎる

いつそ自害して閻魔様に會ほか

かうした不幸はもうけつこう

もうけつこう

婚訂後（見合ひのやうなことをしてから）何時迄たつても結婚さしてくれないのでその焦燥を唄つたものである。
有差錯は直譯すれば間違つてゐるといふ意。奴は娘が自分をわたしと言つてゐるのである。叫奴胡思想は直譯すれば、我が思ひを混亂せしむである。好像はよく似る。碰死は何かへ頭をぶつけて死ぬこと。

ハ、婚 約（許婚）

1. ◇ 未婚妻

喜鵲喜鵲叫喳喳

◇ 婚約者

鵲嬉々と啼いてゐる

提籃進城去賣花
一賣々到丈人家
又是扯 又是拉
拉我進屋喝杯茶
風吹簾起望見她
烏黑髮 白玉牙
粉紅臉 賽桃花
回到家裡請媽々
快用花轎擡來她

2. ◇ 看見她 (其の一)

啾々兒哩 啾啾兒啾
沙土地兒裏放白馬
去了鞭 跑了馬

籠を持つて城内に花を賣り
知らず識らずに嫁御の家に着いた
手取り足取り引入れられて
部屋に入れられ御茶飲まされた
風の情で簾越しに見れば
烏の羽の黒い髪 白いきれいな玉の齒
櫻色の顔 桃の花も及ばない
家に歸つて母さんにせがむ
早く花轎で昇ぎ入れてよ

◇ 彼女を見る

るるり らるるら
原に白馬を放ちやり
鞭も放り捨て馬うつちやつて

一跑到到丈人家
東風兒刮 西風兒刮
刮起簾子兒來看見她
漆黑的頭髮一大摺
鮮紅的頭繩沒根扎
脚兒好似錐々把
手兒好似麵疙疸
娘 娘 娶她了吧
今年小 過年大
緩々年頭兒再娶吧
一兩糸 二兩麻
桃花園兒裡吊死去吧

一跳びに舅の家へゆく
東風吹き 西の風吹き
簾めくれて彼女が見えた
髪は黒々房々と
お下げの根つこに眞紅なりボン
足は小さくて錐の様で
手はふつくらと餅の様だ
おつ母あおつかあ 娶つてよう
今年や小さくたつて年とりや太る
否々急がず貰やい、
そんなら麻繩持ち出して
桃林で首吊つて死んで見せる

3. ◊ 看見她 (其の二)

水扁擔鈎 生鐵打
我上沙河去溜馬
丟了鞭子馱了牠
一氣跑到丈人家
大舅子哥看見我
挽々袖子拉着我
拉住我 拉住我
給我拉到屋裏坐
東風亂 西風吹
刮開門簾看見她
黑黑的頭髮 紅繩紮
雪白的臉蛋官粉搽

◊ 彼女を見る

水汲む擔ひ棒の鈎 銑鐵で造る 序語
沙河のあたりで馬遊ばして
鞭を失ひ馬の足傷めた
そこで一氣に舅の家へ駆けた
兄さん見つけて
袖つかんでひつばつた
づるづるにひつばつて
部屋までひつばつた
東風吹き西風吹いて
簾めくられて彼女が見えた
髪は黒々 リボンは紅い
塗つた白粉卵顔

通紅の嘴唇 糯米牙

小金蓮 不過二寸七八

一步兩步跑到家

告訴媽

典房子賣地也要娶她

娶到她

不是她

臉上麻子銅錢大

橄板子脚

猪唇獠牙

三棵頭髮挽了個髻

綠綢子褲 儘是些尿葛拉

打一輩子光棍也不要她

紅い唇 小粒な齒並

可愛い小足は赤兒ほど

一足二足飛ぶ様に歸り

母に話していふのには

家は質に出し土地賣つても娶はら

彼女もろたら

彼女ぢやないわ

面にや銅貨の大あばた

足はでつかくて

とんがり口に猪の牙

あかい三本毛で髻結ひ立て、

緑の絹ズボン 小便跡だらけ

これぢや獨りがよつほど増した

大舅子哥は妻の兄、小舅子は妻の弟。紅梗紮は赤い紐で結ぶ意。小金蓮は纏足を美化していつたこと。一步兩步跑到家は一步か二歩で歸宅した意で、跑は爪先で土を蹴つて跳ぶこと。板子脚は糸を捲く長方形の板の様な足。三棵頭髮は三本の頭髮、つまり緒毛縮れつ毛である。

4. ◇ 看見她 (其の三)

小紅車 白馬拉
一拉々到丈人家
丈人出來往裏讓
小舅子出來往裏拉
她倚着門框羞答々
丈母娘去擺肉
丈人去端酒
她一翻身往裏走

◇ 彼女を見る

小紅車 白馬が曳いて
がらがら舅の家へゆく
舅が出て来て「よう来た」と
弟が出てきて「さあどうぞ」
彼女は門に靠れて羞かしさうに會釋した
姑は御馳走こしらへて
舅は酒を持って来る
彼女は部屋へ駆け込んだ

也沒吃飯 也沒喝酒
一氣去往家裏走
回家告訴她
明年接她
看她還羞答不羞答

小紅車は蒲鉾馬車を美化して言つたこと。擺肉の擺は佈置するといふ字で、竝べること。端酒は手に酒を持つこと。

七、嫁、婿に關するもの

小さな夫・夫婦善不善・寡婦と・この項など全く支那ならでは見られない。

1. 小さな夫

1. ◇ 七歳郎

◇ 七つの旦那さん

二十歳大姐嫁個七歳郎
脱鞋脱襪抱上牀
洗手洗臉送學堂
先生叫聲阿媽媽
不是阿媽媽
是個前世修來老婆娘

2. ◇ 矮女婿

新做茶壺光又光
新買小豬不吃糠
新娶媳婦不吃飯
眼淚汪汪想親娘

二十の娘さん七つの子に嫁した
鞋を脱がしたり抱へたり
顔まで洗つて學校へ送る
先生妻を小母さんと呼ぶ
いゝえ小母さんぢやないことよ
前世の善行酬はれて
此の世の妻となつたのです

◇ ちびの婿さん

新らしい鐵瓶はびかびか光る
買ひ立ての小豚は糠喰はない
妻ひ立ての嫁さんは飯喰べない
母を慕つて泣くばかり
(それで嫁さん逃げ出して)

走一里 過二郷
看見哥嫂插黃秧
哥々洗手接妹々
嫂々洗手接姑娘
姑娘接到堂前坐
問々姑爺有多高
不提姑爺還罷了
提起姑爺惱斷腸
三尺布兜做夾襖
剪々斷々還嫌長
燈碗裡邊洗個澡
踏板裡頭換衣裳

一里走り 二村越せば
兄さん夫婦が苗植ゑしてる
兄さん手を洗ひ妹を迎へ
嫂も手を洗ひ娘を迎へる
娘を部屋に坐らせて
(兄さん妹にさくのには)
婿さん背丈はいくらある
婿さんの話がなければよいが
話せば腸も千切れさう
三尺の布で袴を縫へば
切つても切つても尙長
燈臺の中で浴して
踏箱の中で着物着換へ

茄子底下看跑馬
莧菜下邊乘風涼

茄子の下で競馬見て
蒺藜草の下で夕涼み

莧菜はまた莧草、蒺藜草のこと、婿さんの話は斷腸の思ひだと言つてゐながら、其後の
比喩で笑はすところは、聞く者をして斷腸の思ひたらしめる。

3. ◇ 小丈夫

十八歲大姐三歲郎

十八の嫁さんと三つの婿さん

把屎把尿抱上床

あしつこ、うんこさして抱いて寝る

睡到半夜要奶吃

夜半にお乳を欲しがつて

叭達一叭達一兩巴掌

ばたばた兩手で叩きます

我是你的妻

妻あなたの妻なのに

不是你的娘

ちよつと、母さんと違ふわよ

4. ◇ 不叫娘

◇ 母と呼ばず

待説郎來 郎又小

夫だと思つてもあんまり小さい

待説兒來 不叫娘

我が子と思つても母さんと呼ばない

你小 我不嫌你小

あんたの小さいの妻はいゝが

我老 你也別嫌我老

妾年とつても嫌はないでね

この歌の様な場合には女はもう覺悟しなければなるまい。けれども重男輕女で殆んど女の存在など認められなかつた時代にはどうすることも出来ない。

こゝに一應結婚の種類を述べることにする。支那の結婚にも正式と非正式との二つの場合があり、正式は別として、こゝに掲げた様な非正式の種類は、地方々々で名稱は異なるが上海時事新聞掲載の「蘇州の結婚」といふ記事には招贅、養媳、冥婚、轉房、搶婚の五つがある。これによると招贅は俗に招女婿といひ、娘のみで他に家督相続者もないといふ場合に行ふ例外的結婚で、入婿となる男が妻の姓を名乗るのである。日本では珍らしいくないが、「宗法」を根本主義とする支那の家族制度にあつては、全く萬止むを得ない場合である。次に、養媳は俗に童養媳婦といひ、中流以下の家庭にして、息子の爲に正式に嫁を貰ふ資力が無いと考へた場合、貧乏人の娘を貰つて息子の成長を待つのである。普通は

これは男が赤ん坊である。

次に冥婚は俗に抱牌位結親といひ、婚約の後に相手の男が死んでも女は義務の履行を強ひられ婿家に入つて寡婦生活をするのである。

次に轉房とは、夫の死後その寡婦が夫の兄弟と一緒にすることで、貧民にのみ許される恥辱的なことであるが、日本などには珍しい事ではない。

最後に搶婚の搶は掠奪である。婚約の後、女の家ではこの結婚を好まず故意に遅引する場合に男の方では待切れずに搶婚を強行するのである。轎子や樂手や執事人を用意し、女の家を不意に襲つて、花嫁を轎子に押込み、爆竹を鳴らして擔ぎ去るのであるが、かゝる不穩な行爲も社會生活の種々相を背景として合理性が與へられるのである。

□、夫婦善不善

1. ◇ 好妻房

好妻房 孝順娘

晚上舖被褥

早起安康

◇ いゝ嫁さん

いゝ嫁さんよ孝行者よ

夜は舅さんの床のべて

朝はやさしく御機嫌うかがひ

午時煮好飯

地裡翻瓜秧

翻秧未完

日又落

回房掌上燈

低聲悄語問聲郎

你可累得荒

午にはうまい御飯をこさへ

畑に出ては畑仕事

仕事なかばに

夕陽が沈みや

部屋へ歸つてあかりを點し

小さな聲で夫の耳に

「あなたお勞れになつたでせう」

翻瓜秧は瓜の手入れをすることだが、畑仕事といふ意。典型的な良妻の日常である。

2. ◇ 不同郷

哥々送我八里路

嫂々送我八口塘

塘裏鯉魚八尺長

◇ 出戻らぬ

兄さんは八里も送つてくれた

嫂さんも八口塘で見送つてくれた

塘には八尺大きな眞鯉

金子銀轎接我不回郷

鶏生牙齒馬生角

鐵樹開花我才回

金銀花轎で迎へに來ても

鶏こに齒が生え馬に角生え

蘇鐵に花でも咲いたら歸らう

八口塘は池名。多く愚痴が述べられるのにこれは立派な嫁の覺悟である。

3. ◇ 菊花兒

菊花兒開

板凳兒歪

嫁個漢子不成材

三天沒有米

四天沒有柴

這箇日子過不來

拍々塵土走起來

◇ 菊の花

菊がきれいに咲いてゐる

腰掛けはぼろぼろに破れてる

妻の夫は甲斐性なし

これで三日も米がない

今日で四日も柴がない

これではとてもやり切れない

塵を叩いてお別れだ

4. ◇ 槐樹底下

槐樹底下搭戲臺

我叫三姐聽唱來

三姐自那哭上來

我問三姐哭甚麼

尋個女婿不成材

吃嘴摸牌我不惱

不該半夜不回來

◇ アカシヤ樹の下

アカシヤ樹の下芝居小屋

三姐ねえさん呼んで聽きに來た

ねえさん泣き泣きやつてくる

ねえさんどうして泣くのです

わたしの夫にやほんとに困る

買ひ喰ひマーヂャンまだいゝけれど

丁半遊びにやりきれぬ

支那の芝居は唄ふのが主になつてゐるので、芝居を聴くといふ。

5. ◇ 懶大嫂

懶大嫂 懶大嫂

起來又睡倒

◇ 怠け女房

怠け女のだれ女

起きたと思つたら又睡る

聽得門外賣糖糕
披了衣裳往外跑

6. ◇ 懶老婆

真可笑 真可笑
娶個媳婦好走道
家裡活計他不作
整天還把街上到
含煙袋 串門子
穿雙破鞋不害臊
頭不梳 臉不洗
一天不把鏡子照
丈夫說 糟了糕
這個日子過不了

外にも菓子あまの叫こゝろび賣りさけば
着物ひろげて駈けて出る

◇ 惹け女房

本當に本當にをかしいな
貰つた女房は遊び好き
内の仕事は何もせぬ
朝から晩まで街にきてぶらぶら
煙管を銜へて隣へ行つて喋しゃべる
破れた鞋でも羞しがらず
髪は梳かずに 顔洗はずに
終日鏡を使はずに
これには夫も「困つたな
こんなくらしは過あやごされぬ

把他送回娘家去
誰願要你誰就要

糟了糕は俗語で、困つたなといふ意。

7. ◇ 農 婦

農村婦 最可憐
夏日越發不得閑
山野裡 忙一天
夜晚還得去縫連

女房は里へ返さうか
誰か欲しい者はないものか

◇ 農村女

村の女は可哀想だ
夏は益々暇がなく
野良に一日働いて
歸れば夜は針仕事

◇ をんどり

雄雞どりは頭をつゝき合ふ
夫婦喧嘩はあとひかぬ

(一夜明ければ心はとけて)

8. ◇ 公 雞
公雞打架頭頂頭
兩口打架不記仇

早晨一盆洗臉水
晚上一個花枕頭

朝は一つ盆で顔洗ひ
晚は一個の花枕

打架は喧嘩。兩口は夫婦。尙、兩尊は御兩親なれども兩祖はモロ肌脱ぐの意。

八、寡婦

1. ◇ 趕廟

四月裡 四月啊十八
娘々廟上 又把香插
人家灼燒香爲兒女那麼
呀呀咦呀 我寡婦燒香
爲的什麼啊呀呀咦呀

◇ 廟詣り

四月十八日娘々様で
今年又焚く線香の煙
どこの家でも子を産む様に
わたしや寡婦でもお線香焚いた
何の爲やらアヤヤイヤ

娘々廟は、子授けなどには何等與かる資格のない寡婦さへも、人並みに香を焚かすには

ゐられない程民衆に魅力を持つて、春とともに各地に賑はつてゐる神様である。

2. ◇ 小寡婦

小寡婦 十七八
開開簾 沒有他
關着門 黒谷洞
打着火 點着燈
我看燈 燈看我
看來看去冷清清
清早起來進廚房
厨房地 我掃光
大鍋刷的明似鏡
大鍋靠 大鍋蓋
小小寡婦靠公婆

◇ 小さな寡婦

十七八でわたしは寡婦
簾をあげても夫はゐない
窓を閉めればお部屋は暗い
ランプ點してあかりを見れば
ランプのあかりもわたしを見てる
何を見たとして淋しいばかり
朝は夙く起き厨に行つて
厨きれいに掃除すまし
鍋もきれいに磨いたけれど
蓋のない鍋どうしましよ
舅姑わたしの頼り

你這沒兒難致富
我這沒郎難做活
你家沒有梧桐樹
鳳凰難在你家落

息子に死なれて親達困り
夫に死なれてわたしも困る
桐の樹枯れたお前の家に
いつまで鳳凰がとまつてやら

八、諷刺、雜

痛烈なる諷刺、悠容たる諧謔、何等表現に擬はれない裸のままの調子毎時に讀者を抱腹絶倒せしめる。大陸的な調子がよく出てゐると思ふ。

(イ) ◇ 打櫻桃

月亮起山一丈高
姐々駝竿打櫻桃
人又矮 樹又高
脫掉花鞋踏樹凹

◇ さくらんぼをとる
月は山の端にさし登る
姉さん竿で櫻桃とり
人は小さく 樹は高い
花鞋脱いで樹の股にのつて

過路公子莫笑我
我家孩兒要吃大櫻桃

もしもし若い衆笑はないでよ
うちの子供が喰べたがるの

これはあられもなく姫御前が、月の出の頃ひそかに樹に登つて櫻桃をとつてゐる光景を皮肉つて唄つたものである。公子は若い衆としたが、若旦那、令息など上品な意である。ようようと囃して通る若い衆にさうぢやないわよ、と辯解してゐる微笑ましい漫畫風景。

(ロ) ◇ 張大嫂

張大嫂李大嫂
上南園摘豆角
一籠豆角沒摘了
提着椅子向家跑
跑到炕上舖穀草
放了個屁

◇ 張嫂さん

張嫂さん 李嫂さん
南の畑へ豆摘みに
一籠豆を摘まんうち
裾をまくつて駆け歸り
急いで炕の上へ藁敷いて
お屁を一つぶつとした

白拉倒

馬鹿々々しいつたらありやしない

臨月の腹を抱えて畑へ出てお腹が急に痛んできたので、あわてゝ家へ駆け歸つて産褥をつくつてゐたら、お尻一つですつとしてしまった。馬鹿らしいといふ意。

(ハ) ◇ 懶學謠

春天不是讀書天
夏日炎炎正好眠
秋有蚊蟲冬有雪
收拾書箱好過年

◇ 怠けものゝ歌

春は本讀む時ぢやない
夏は暑くて眠くなる
秋は蚊がくふ冬雪が降る
本は箱のまゝで年を越す

これではもうおしまひだ。而も人の心にやりと迫るものがある。

(ニ) ◇ 懶大嫂

小老鼠 眼睛小

◇ 怠け嫂さん

小老鼠 眼睛小

我家有個懶大嫂
露着太陽就睡覺
晌午起來還嫌早
梳々頭
裹々脚
燒餅饅子買一包
吃飽了
拉淨了
躺在床上裝病了
請上神
擺上案
嚇的老頭子打冷戰

うちに怠けものゝ嫂ござる
陽のある中に床に就き
晝頃起きてまだ寢足らん
髮梳いて
足巻いて
餅やお菓子を買ひ込んで
鱈腹詰込み
うんこしたら
床へ這ひ込み假病つかふ
御祈禱だ
御供物だ
おどかさされて老人はふるへてる

裏々脚は纏足した足を巻き直す意。請上神、擺上案は嫁の病氣に吃驚した亭主の狼狽振りを嘲笑した言葉で、その次の嚇的老頭子……は、この騒ぎに経費のかゝるの恐れてビクビクしてゐる老人連を揶揄したものである。

(ホ) ◇望一望

踏着高山望一望
高山底下一棵槐
槐樹底搭下戲台
我問戲子怎不唱
有錢的君子還沒來

◇見渡せば

高い山から見渡せば
山の麓に槐樹の木
槐樹の下には芝居小舎
早くやらんか言つたらば
金持の旦那はまだ來んわい

搭戲台は舞台が作つてある意。戲子は役者、金持が來ないのに芝居がやれるかい、と言ふところは面白い。

(ハ) ◇郷裏大姐

◇田舎の姐さん

郷裏大姐上街來
黃泥巴裡腳花鞋
一踏々了半邊街
磚頭瓦塊都掀起

田舎の姐さん街へ來た
泥にまぶれた鞋穿いて
街の片側泥だらけ
石ころかけら皆蹴つて通る

これは都會の者が田舎の女を悪口したものである。掀開は蹴飛ばす。

(ト) ◇説老婆

公々鶏 上塚草
俺媽不給俺說老婆
一說說了七八個
好的都跑了
剩些爛菜貨
叫她去掃地

◇嫁取り

公々鶏 上塚草
阿母はわたしに嬲もろてくれぬ
貰うとなると七八人ももろた
よいのはみんな逃げ失せて
残りは菜つばの腐れかけ
庭を掃けといふに這ひつくばつて

爬個炕放屁
叫她去刷鍋
跳在鍋裏洗裹脚
叫她去刷缸
跳在缸裏洗褲襠
叫她去借篩子
和人比量奶子
叫她去借秤
和人比量臀
叫她去摘黃瓜
爬着牆頭罵人老王八
叫她去摘茄子
爬着牆頭罵人老爺子

溫床の上で屁をたれた
鍋を洗へと言へや
それを跨いで中で足洗ひ
甕を洗へと言へや
それを跨いで中でズボンの股洗ろた
篩借りにやりや
人とお乳比べ合ひ
秤借りにやりや
人とお臀の比べつこ
黃瓜採りにやりや
塀の上へ登つて人をバカといひ
茄子を採りにやりや
塀の上へ登つて人を阿呆たれと罵つた

よくも思ひ切つたと思ふ程の唄ひ方である。正に天下泰平である。
褲襠はズボンの股のマチ。奶子は乳房。老王八の王八は人を罵る語であつて、無賴漢、
ならず者等、北方花柳界にて妓樓に使用せられる男衆、番頭の類をいふ。

(チ) ◇ 莓豆花

莓豆花 包層々
我和姐々一塊生
姐生在尿床上
我生在土炕上
姐々蓋的大花被
我蓋的七襪頭
姐々鋪的大花褥
我鋪的破篩頭
姐々枕的大花枕

◇ 莓の花

莓豆花 包層々
わたしと姉さん一緒に生れた
姉さん小便所の床の上で生れ
わたしは溫床いんごうの上で生れた
姉さん被るのは花蒲團
わたし被るのはポロ蒲團
姉さん敷くのは花蒲團
わたし敷くのはポロ蒲團
姉さん枕は花模様

我枕個破棒子頭
姐々騎匹桃紅馬
我騎的驢頭
姐々戴個領盤子
我扣個尿罌子
姐々拿個紅鞭杆
我拿個猪尾把
嘔——哦嚙

この歌は女の運命を皮肉り、双生兒でも運不運で、一は富者に嫁ぎ一は貧乏神みたいな亭主を持つと唄つたものである。
桃紅馬は赤い紐に鈴をつけた化粧馬。

私の枕は棒の頭
姉さん乗るのは桃紅馬
わたし乗るのはボロの驢馬
姉さん立派な頭巾冠り
わたし小便壺冠ります
姉さん赤い飾鞭
わたしは豚のしつぽ持つ
はい——どうどう

(リ) ◇ 還

缺你錢 給你錢

◇ 借金 返済

借りた 拂ふよ

房後二畝莎草園
長成樹 解成板 打成船
去河裡 謳千里
船謳爛 釘打鎌
割棗刺 插路邊
挂羊毛 扞成氈
賣了氈 給你錢

裏の畑の雜草が
樹になつて 板になつて 船にして
河へ浮かして千里置いといて
船が腐つたら釘で鎌つくり
棗を伐つて路端に挿して
羊毛をかけ、毛布作り
毛布賣つたらそれで拂ふ

莎草はハマスゲ、多年草、根は香附子といひ薬用に供せられる海岸に多い植物。滿洲には少し縁遠い河南のものだけに、船などを比喩の材料にしてゐる。こんな人間にかゝつちや債權者も浮かばれまい。まさに大陸的である。悠々たる中に而もふんわりと諷刺的效果を収めてゐる。

(ヌ) ◇ 小板橈

小板橈 碰鍋台

◇ 板の腰掛

小板橈 碰鍋台

爺々娶個秃奶奶
眼又斜 嘴又歪
氣得爺々仰擺々
奶々奶々你走罷
爺々好了你再來
搽上粉兒
樂的爺吧噠嘴
戴上花
樂得爺々撓脚鴨

爺々は祖父、奶々は祖母。

(ル) ◇ 哭爹媽

兒子哭的驚天動地

お爺さんの嫁さん秃婆さん
斂睨みで 口曲り
爺さん怒つて寝てしもた
婆さん婆さんお歸りよ
爺さんよくなりや又お出
白粉塗つたら
爺さん喜んで口きいた
簪さしたら
爺さん喜んで跳んではねた

◇ 父母の死を悲しむ

息子は大きくわつと泣き

閨女哭的真心實意
媳婦哭的浪聲浪氣
女婿哭的趕不上驢臀放個屁

娘は眞實まごころ々と泣く
嫁の泣くのは上の空
女婿泣くのは驢馬の屁

父母の死んだ時遺族は泣き悲しむ、これはむしろ禮である。その誠意の有無は聲でもわかるといふのである。趕不上以下は立停つて動かない驢馬の臀をびしやつと叩いた拍子にぶつとたれた屁のやうなものだといふ意。

(ヲ) ◇ 不開窗

妳爲什麼不開窗
外頭鬧嚷々
妳爲什麼不洗臉
沒有胰子鹼
妳爲什麼不梳頭

◇ 窓をあけない

あなたどうして窓開けない
外がうるさいもんですから
顔はどうして洗はない
洗ふ石鹼がありません
どうして髪を梳かないの

沒有桂花油

つける油がありません

何とか彼とか理窟つけて不精に寝そべつてゐる嫁を諷したものだ。吉林地方で唄はれてゐる。

(ワ) ◇ 種田錢

種田錢 萬々年
做工錢 後代延
經商錢 三十年
衙門錢 一蓬烟

◇ 百姓の財産

百姓のお金は萬年續く
職人のお金は一代限り
商人のお金は三十年
官吏のお金は一瞬間

粒々辛苦の百姓の財産の堅實性を唄つたものだが、官吏にはずるぶん虐められたものらしい。

(カ) ◇ 推豆腐

一粒豆子圓又圓

◇ 豆腐にすれば

まるい小さな一つの豆も

推成豆腐好賣錢
人々說我買賣小
小々買賣賺大錢

豆腐に作れば金になる
小さな商賣だとみんなはいふが
小さな商賣が大金蓄める

(コ) ◇ 錯算命

姐在房裏繡花枕
耳聽門外絃子聲
開々門來請先生
先生請到屋裏坐
報個八字給你聽
拿起八字算一算
還有三年方動婚
姐兒一聽就生氣

◇ 外れた占ひ

姐さんち部屋で枕の刺繡
そこへ盲の八卦先生
蛇皮線ひきやつてきた
「八卦先生お入りよ
わたしの運勢見て頂戴」
「よしよしフムフムなあるほど
三年たてば嫁にゆく」
「何だ盲のこの野郎

罵聲瞎滾出門

「頭胎生過了！」

二胎要臨盆！」

わたしや子供が一人ある

まもなく二人目生れるよ」

盲を表につき出した

占師は盲に限られてゐる。それが子供の杖にすがつて笛を吹いたり蛇皮線をひいたりして街から街を流れてゆくが、それを算命先生とか風水先生とかいふ。算命先生は運勢、風水先生は家相や墓所の方位などを占ふ。こゝでは、まんまと外れてしまったのである。八字は生年月日時、時は、辰の刻とか亥の刻とか。算は占である。瞎はめつち、めくら、このどめくら奴といふところである。

(夕) ◇ 生了白鬍子

一二三四五

我要學打鼓 打鼓怕使力

要學織斗笠 斗笠空々多

一二三四五(序語)

太鼓たゝきにならうかな

笠編みにでもならうかな

◇ 白髮の翁となりけり

力が要つて辛いだろ

我要學補鍋 補鍋難得產

我要學補碗 補碗難鑽通

我要學端公 端公難跳神

我要學女人 女人難做鞋

我要學秀才 秀才難教書

我要學宰猪 宰猪宰不死

すきまだらけで駄目だらう

鍋つくろひでも習はうか

破れ鍋なかなかつき難い

茶碗つきでもやらうかな

錐がなかなか通るまい

端公にでもならうかな

跳神の儀は大へんだ

いつそ女にならうかな

鞋縫ひだつてむづかしい

秀才になつてやらうかな

教へるなんて容易ぢやない

豚殺しにでもなりたいが

豚もなかなか死なぬだろ

生了白鬍子

(あれやこれやで日を暮らし)

白髮の翁となりけり

端公は薩囃教の巫である。薩囃教は滿洲本來の一つの宗教で、神と人との間に立ちその橋渡しをするのが巫である。跳神の儀はこの教の大事な神事で、巫が神が、り状態になり跳ね廻るのである。鞋縫ふことは女の大きな役目になつてゐる。

秀才は支那の漢以後歷朝に行はれた文官試験の第一階梯で、郷試に合格したものに與へられる文官資格である。この文官試験は科擧制度といひ、殿試、會試、郷試の三試より成り、殿試は天子自ら朝廷に於て行ふ最高試験で、合格すれば進士の稱號が與へられ、特に第三位までの合格者を狀元といつた。會試は政府が行ひ合格者は擧人の稱號を與へられ、郷試は地方長官が行ふものである。

(レ) ◇ 反 常

人多亂 龍多旱

陰天日頭獨頭蒜

◇ 事も過ぎると

人多ければ亂となり龍多ければ旱となる

曇天の日射しに一つ實蒜

媳婦多了婆々做飯

嫁が多いと姑飯を炊く

人は協力して事をなすが多いと和を欠くものであり、龍は雲や雨を掌るものであるが多いと旱魃を起し、曇天に一條の陽射しは暑く、たつた一個で根をなしてゐる蒜は辛く、嫁も多いと圖々しく威張り出す、といふ物事の限度の誡めである。嫁が多いといふのは大家族だからである。

九、風俗的なもの

(イ) ◇ 破牛車

破牛車 疙瘡套

拉白草 上蓋州

小小子 耍頂帽

小姑娘 耍枝花

老太太 耍紅糖

拈粘糕

◇ こわれ牛車

やぶれ車に、ぼろ手綱

枯草つけて蓋州へ

坊やに帽子買ってやろ

娘はかんざし欲し相な

婆さん餅につける赤砂糖

小媳婦 要把切菜刀

妻の註文は料理庖丁

正月真近い田舎の情景である。ぼろぼろ牛車にこぶだらけの手綱は一年間の辛苦の形見であらう。

(口) ◇ 千金寨

三國誌有個猛張飛

騎黑馬 跨黑雕

手裏拿個鐵勺子

那裏去

千金寨去掘煤

◇ 撫順

三國誌中の張飛さん

顔は眞黒、黒ん坊

眞黒馬に跨つて

スコップ持つてどこへゆく

撫順へ石炭掘りにゆく

張飛は支那三國時代蜀の武將で關羽と兄弟の約を結んで先主劉備に仕へた。非常な猛將であつた。劇などで劉はその顔白く、關羽は紅く、張飛は黒で馬も亦同じ色であつた。何から何まで眞つ黒けだから、撫順に流れ込む石炭掘りの意氣込みと一緒にしたのであらう。

煤は石炭である。

(ハ) ◇ 東三省三怪

東三省三宗怪

窓戸紙 糊在外

養了孩子吊起來

十七八的姑娘含煙袋

◇ 滿洲三不思議

滿洲不思議が三つある

窓の障子紙外に張る

子供育てるにぶら下げる

娘十七八煙草吸ふ

支那本土では窓の障子紙は棧の内側に張るのに滿洲では日本内地のやうに外側に張る。搖籃は下に置いて揺るべきものを、滿洲ではぶら下げる。ぶら下げるのは吊と言つて嫌ふのである。もう一つは植民地氣分で、女子の風儀の悪いのを言つたのである。

(ニ) ◇ 東三省三奇

東三省 三宗奇

棍打獐子 瓢白魚

◇ 滿洲三不思議

滿洲不思議が三つある

棒で叩いて獐をとる

野鷄飛到大鍋裏

瓢で魚が掬はれる
雉が鍋まで飛んで来る

これも昔山東から渡つて来た移民の驚きであつた。當時は人煙稀で、獸でも鳥でも魚でも自由に跋扈してゐた。殊に吉林方面では樟と言つて鹿に類する獸が棒で叩いて捕れる程ゐたし、黒龍江方面では水汲みの瓢で魚が掬へた。奉天地方では雉が鍋にまで飛び込んで来る程ゐたといふのである。

(ホ) ◇ 滿洲的三宗寶

關東山

◇ 滿洲三寶
滿洲で

三宗寶

大事な寶が三つある

人蔘貂皮靛鞞草

人蔘、貂の皮、靛鞞草

靛鞞は滿洲人の穿く皮鞋、靛鞞草は所謂つくさで、柔軟性に富んだ草木である。滿洲人は毎日鞋の中に入れ換へる大切な草である。

一〇、他三題

これらは漢民族の嗜好のやうなものであつた。適度ならうま味もあつたものを、度を過ぎて、味實共に殺してしまつた

イ、鴉片

1. ◇ 鴉片

◇ 阿片

一、奉勸世間人
莫學吸洋烟
南方罌粟草
調治熬成烟
行到中原地
鳩毒無二般

申上げます世間の人に
阿片習ひはしなざるな
南の方の罌の草
煮つめて阿片に造られて
支那の本土に送られりや
鳩毒みたよに害をなす

哄騙我國財
戕生命不全
道光爺知毒
設禁不容寬
共英夷爭鬪
兩下動刀懸
輪金議和聯

道光爺は道光帝。鴉毒は鴉といふ猛毒鳥の毒。阿片の製法は略する。

二、抓耳又撓腮
老是不舒坦
不是打噴嚏
就是打喝閃

國の寶を奪ひ取り
人の命を削り取る
道光天子害を知り
掟つくつて禁止して
英國相手に戦へど
戦利あらず敗戦し
金をとられて和陸する

耳鳴りがして腮が弛み
年が老ひてもこれ程ぢやない
噴嚏が出なけりや
欠伸がつゞき

咽喉又發痒
咳嗽吐青痰
腰疼腿麻木
身上打冷載
眼中流雙淚
虛汗拭不乾
小肚圪津疼
心裏上下翻
走頭無有路
坐占不能安
勾頭熟大麥
如同二棉蠶
行走灣着腰

咽喉がむづ痒く
咳嗽が出て痰が出る
腰が痛く足が懶く
ぞくぞく悪感がし
兩の眼から涙が流れ
虚汗は乾く間がない
胃がさりさり痛み
づきんづきん動悸がする
歩かうとすればふらふらし
坐つてゐても倒れさう
大麥のやうに頭を垂れ
三眠の蠶みたよに頸が透す
歩く時は腰を曲げ

如弓却少弦
嘴唇如綻染
臉似黃紙丹
話也懶得說
霍食不自甘
週身都串遍
恰似害傷寒
良醫難調治
要好得吃烟

噴啼は噴嚏の誤、喝閃は欠伸の誤、冷載は戰慄。坐占の占は跖の誤。二棉蠶は三眠蠶の誤。

三、父母終日晷

父母は一日罵り散らし

妻子常抱怨
鄉黨看不起
親戚他也嫌
身體盡損壞
況外化良錢
傾家又敗產
急則生短見
也有喝烟死
還有把梁懸

妻子は常に怨を抱く
郷黨には見捨てられ
親戚にも見限られ
身體はすつかり駄目になり
お金の費えは多くなり
左前より身代限り
急に世の中悲観して
阿片を飲んで死ぬもあり
梁に懸つて死ぬもある

此の歌の譯者「滿洲と支那の民謡」(滿洲弘報協會昭十二版)山下一良氏曰く、支那から阿片を除けては刺身に山葵が無いにひとしい。滿洲人でも支那人でも少し餘裕のある人なら大概は阿片を喫む。茲に阿片に関する歌を収録したいと苦心したが適當なものないのが遺憾である。左に掲げる歌は、同治四年(一八六五年)刻本の小冊子に収録されたもの

で誤字ばかりから成り、いかにも拙いがしかし一片の情熱を以て世に阿片の害を訴へた一種の警世歌であると。

2. ◇鴉片

鴉片本是外國生
到我國來就變彊
閻王未出勾魂票
幽明燈到先點好
一耗精神二耗錢
三餐茶飯常欠缺
四季衣服不連牽
五更寒冷小被蓋
六親斷絕真可憐
開門七件無來路

◇阿片

阿片はもともと外國ものよ
支那に渡つて人間殺す
閻魔様から呼ばれぬ先に
お燈明をばお供へ申し
一に精力二に金費ひ
三度の御飯もろくろく喰へぬ
四季の着物に着換へを持たぬ
五更の寒さに煎餅蒲團
親兄弟には見放され
米味噌さへも得る道がない

八字生來顛倒顛

運勢つきて青息吐息

勾魂票は閻魔様からの召喚状。幽明燈は佛前に供へる燈明。六親は父母妻子兄弟。七件とは柴、米、油、砂糖、鹽、醬油、茶をいふ。八字は生年月日より運勢のこと。豆油の小さなランプに幽かな火を點して阿片を吸ふ様は、それがまるで佛前に供へる燈明のやうであるから、閻魔様から呼出状のこないうちから……と皮肉つたものである。

□、纏足

◇纏足

裹脚呀 裹脚
裹了脚 難過活
脚兒裹得小
做事不得了
脚兒裹得尖

◇纏足

纏足よ 纏足よ
纏足しては困るだろ
小さな足では
仕事が出来ぬ
足先痛くて

走路只喊天

只泣くばかり

一走 一蹙

びつこりしやつこり歩いて行つて

只把男人當作靠身磚

男の體に縋つて暮す

今こそ纏足は十四五歳以下の者には見られないが、この風習は南北朝、齊東昏侯が、金で蓮花を刻み、地上に置いて潘妃にその上を歩かしめ、その足の小なるを讚美したのが初めであると傳へられ、それから幾千年か支那の女には絶対不可分のものとなり、歌に唄はれてゐる如く美人の第一條件となつたもので、纏足した足を金蓮、蓮歩と美稱し、その小なるを讚へ、花の刺繡ある棉入、緞子の鞋を穿つといふのが極り文句となつてゐる。これを單に風俗史的に見ず、社會學の見地よりいへば、支那が今日の如き一種の老廢國となるについては色々な原因はあるけれども、纏足などもその一つの重大な原因となつてゐると思はれる。即ち歩むことすら困難な位に、上は貴族社會から下は非人乞食に至るまで、その小なる足を珍重する結果、何時かは女は動くことすら不可能な完全不具者と化し、従つて彼等は單なる男の性的對象、寧ろ玩具に等しい人とし、無價値なものとなつてしまつた。この女が幾千年かの長年月、生み育てゝきた支那が今日の如くなつたのは蓋し當然ではないかと思はれる。(山下一良氏「滿洲と支那の民論」)

尙、永尾龍造氏著支那の民俗に依れば支那では「結婚の當夜花嫁が處女たるや否やを試験する習慣がある。此の國では、昔から女子には生れるときから俗に「元紅」といつて先天的に持つて生れる血の塊があり、男子に接しない限りは身體の下部に完全に残つてゐるものと信ぜられて居るので、結婚の夜この元紅が出るか否かによつて、處女であるか否やを試すのである。……又身體の動搖又は過激なる動作に依つて大切な元紅を失ふことを恐れて、外出にも氣をつけ、車や轎への乗り降りにも注意して育てる程の注意深さである」などを参照すると、これなども相當根強い一因なのであらう。

ハ、多妻

1. ◇ 第四夫人

◇ 第四夫人

車轆轆菜並頭開

おほばこ草はどの葉も同じ(序語)

大娘喝酒二娘篩

第一夫人がお酒を飲めば

三娘過來打奴才

第二夫人が酌をする
第三夫人もやつてきて

我也不是偷來的
我也不是跑來的
花紅轎娶來的
四兩金四兩銀
四個鼓鑼把大門

開々握花針札
開々櫃紅綾被
開々箱小靴子鞋子一百雙

一夫多妻の家庭では、第一夫人第二第三第四……といづれも妻ではあるが、格式から言へば第一夫人がどこまでも一位に立てられ、第二以下は何かと第一夫人の御機嫌をとる。

お前は馬鹿だとわたしを叩く
(第四夫人と馬鹿にはするな)

わたしやこれでも盗んで来たり
逃げて来たんぢやありません
紅い轎車でお迎ひうけて
金と銀とを四兩づゝ持つて
四つの太鼓に四つ銅鑼ならし
本門から堂々来たのです
箆筒長持手箱をごらん
花の針さし緋絹のふとん
くつも百足揃つてます

従つて他から想像する程には表面的に波瀾も起らずに済んでゐる場合が多い。しかしお互の間が心底からさう面白くゆかう筈はない。婚禮に當つても、第一夫人のお典入れはなかなか大袈裟で本門からピーピージャンジャン賑やかな行列で迎へられるが、第二夫人以下ではごくひっそりと側門から……といった風なのが先づ普通である。この歌は、右の様な雰囲気の中に胚胎した第四夫人の不満を唄つたものである。

2. ◇ 兩老婆

南山頂上草一坡
爲人不說兩老婆
說的多了光打仗
打起仗來鬧呵呵
有心待把大的打
大的來的年數多
有心待把小的打

◇ 二人女房

南山頂上草一坡(序語)
人は二人の妻持つな
持つたが最後夜も晝も
ギヤアギヤア喧嘩の絶間ない
第一號を打たうとすれば
あれは古參で打たれない
第二の方を打たうとすれば

人家騎馬我騎驢
回頭看々推車漢
比上不足下有餘

3. ◇ 成 仙

天也寬 地也寬
哥々乘馬弟乘船
乘船上大海
騎馬上高山
山有谷 河有灣
不如跨鶴到雲端
星也笑眼圓
月也笑眉彎
和多少神仙一齊玩

人は馬に乗りわしは驢馬
いやいや後にや車曳き
上見れば及ばないが下もある

◇ 仙人となる

天は寛い地も寛い
兄さん馬に乗る弟船に
船で海上に浮び出し
馬で高山に乗りつめる
山には谷あり河に灣はあれど
鶴で雲まで行くやうぢやない
あれあれ星が笑つてる
あれあれ月も笑つてる
あまた神仙もお待ち兼ね

4. ◇ 不倒翁

不倒翁 翁不倒
上輕下重眞靈巧
時常伴作孩兒玩
翁眞年老心不老

◇ 起き上り小法師

起き上り小法師は倒されぬ
上輕下重ほんとうまい
時々子供のお伴して
年は老へても氣は老へぬ

5. ◇ 老 牛

老牛老牛快起身
南山有地還未耕
你我出些力
養活許多人

◇ 老 牛

老牛起きよ早起きよ
南山の畑はまだ出来ぬ
君と僕とがちよつと力出せば
多くの人が養へる

6. ◇ 入 塾

日出東方掛金牌

◇ 塾に入る

東にびかびか日が昇る

人家騎馬我騎驢
回頭看々推車漢
比上不足下有餘

3. ◇ 成仙

天也寬 地也寬
哥々乘馬弟乘船
乘船上大海
騎馬上高山
山有谷 河有灣
不如跨鶴到雲端
星也笑眼圓
月也笑眉彎
和多少神仙一齊玩

人は馬に乗りわしは驢馬
いやいや後にや車曳さ
上見れば及ばないが下もある

◇ 仙人となる

天は寛い地も寛い
兄さん馬に乗る弟船に
船で海上に浮び出し
馬で高山に乗りつめる
山には谷あり河に灣はあれど
鶴で雲まで行くやうぢやない
あれあれ星が笑つてる
あれあれ月も笑つてる
あまた神仙もお待兼ね

4. ◇ 不倒翁

不倒翁 翁不倒
上輕下重眞靈巧
時常伴作孩兒玩
翁眞年老心不老

◇ 起き上り小法師

起き上り小法師は倒されぬ
上輕下重ほんとうまい
時々子供のお伴して
年は老へても氣は老へぬ

5. ◇ 老牛

老牛老牛快起身
南山有地還未耕
你我出些力
養活許多人

◇ 老牛

老牛起きよ早起きよ
南山の畑はまだ出來ぬ
君と僕とがちよつと力出せば
多くの人が養へる

6. ◇ 入塾

日出東方掛金牌

◇ 塾に入る

東にびかびか日が昇る

父親送我讀書來
先生教我幾個字
長大成人中秀才

父さん私を塾にやる
先生私に字を教ふ
大きくなつたら秀才になるんだ

秀才は前出、諷刺と雑の項、「生了白鬚子」参照。

7. ◇ 小鳥兒

小鳥兒
很自由
不怕貓
不怕狗
飛上天
白雲和他作朋友
飛下樹

◇ 小鳥

小鳥は
とても自由だな
猫も恐れず
犬も恐れず
天上高く飛上り
雲と仲良い友となり
林中低く飛入つて

絲葉陰中好勾留

青葉の中に一休み

8. ◇ 殺猪

朱姓人家嫁女兒
陳姓人家娶老婆
人也多 客也多
爲何不殺鵝
鵝說道 鵝蛋一月十七八
爲何不殺鴨

◇ 豚の番

朱さんの家では嫁をやる
陳さんの家は嫁貰ふ
人もたくさん客もたくさん
どうして鵝鳥を殺さない
すると驚鳥のいふのは
月に卵を十七八
どうして鴨を殺さない
すると鴨がいふのは
生れたばかりで骨だらけ
どうして雞を殺さない

鴨說道 新生鴨子連骨皮
爲何不殺雞

鶏說道 五更啼到大天亮
爲何不殺羊

すると雞いふのには

羊說道 毛料年々剪一簍
爲何不殺狗

私は夜明けの時刻ときの番
どうして羊を殺さない
すると羊のいふのには
年々一ざる毛がとれる
どうして犬を殺さない
すると犬のいふのには

狗說道 守夜防賊我看家
爲何不殺馬

私は夜の番家の番
どうして馬を殺さない
すると馬のいふのには

馬說道 一年給人騎到頭
爲何不殺牛

私は年中人の役
どうして牛を殺さない
すると牛のいふのには

牛說道 我耕田地你收租

私は田地を耕してあなたに地代をもらは
せる

爲何不殺猪

私は田地を耕してあなたに地代をもらは
せる

猪說道 今天大家快樂多
爲何獨殺我

どうして豚を殺さない
すると豚のいふのには
今日は楽しい祝日なのに
私ばかりをなぜ殺す

最後に豚が殺されるまでの順序が面白く調子よく運ばれてゐる。殺される豚も運命の前に柔順なのは漢民族の氣持なのであらう。

□、遊戯的なもの

1. ◇ 螢火虫

螢火虫 夜々紅
飛到西 飛到東

◇ 螢

螢 螢 夜毎に紅い灯
西に飛ぶ 東に飛ぶ

給我作盡小燈籠

我にも一つ燈籠おくれ

作盡の盡は燈籠を數へる單位名、作は、として等の意。

2. ◇ 放風等

春風一到天氣好

人家出來放紙鷂

長線放去高

短線放去低

蝴蝶美人滿天飛

◇ 風揚げ

春風吹いて天氣はよい

みんな外に出て風あげる

長い糸は高い

短い糸は低い

蝴蝶美人が空一ぱい

半年も閉ぢ込められてゐた冬の幕が和やかな春風によつて打ち拂はれるのであるから、
満洲の子供の喜びやうは大へんなものである。蝴蝶美人滿天飛は實によくその氣持を唄つ
てゐる。

3. ◇ 稀 奇

◇ 不 思議

稀奇稀奇真稀奇

麻雀踏死老母鷄

螞蟻身長三尺六

八十老翁睡在搖籃裡

不思議不思議ほんとに不思議

雀が雞を踏み殺した

蟻の長さが三尺六寸

八十爺さん搖籃で眠る

麻雀は小鳥のことで、雀とは限らない。

4. ◇ 反 語

東西街 南北走

回頭看見猫咬狗

拿起狗來打磚頭

又被磚頭咬一口

◇ 反 對

東西の街を南北に歩き

振返つて見ると狗が猫に咬まれた

狗を拾つて煉瓦の破片で擲ると

煉瓦の破片は手を咬んだ

5. ◇ 張果老

從南來個張果老

◇ 張果老さん

南の方から仙人の張果老さん

腰裡挾着什麼呀
破皮襖
你怎不穿呀
怕虱子咬
懷裡揣着什麼呀
大乾棗
你怎不吃呀
沒牙咬
吾給你煮々呀
那更好

抱えてゐるのはなんですか
これは破れた皮衣
あなたはどうして着ないのです
虱の咬むのが恐いから
懷の中は何ですか
これは棗の乾したもの
あなたはどうして喰べないの
わたしは嚙む歯がないのです
そんならわたしが煮てあげよう
それは大へん有難う

子供にとっては面白い歌なのであらう。風俗的にも面白い。張家老と言つただけで仙人とわかる程よく知られた物語中の人物である。

6. ◇ 兒 歌

扯鋸拉鋸
老娘門口唱大戲
接姑娘 喚女婿
小外甥 也要去
外甥沒菜吃
捉個鴨子挖蛋吃
煮也煮不熟
燒也燒不爛
急的小孩一頭汗

◇ 子 供 歌

扯鋸拉鋸(序語)
外祖母宅に芝居が建つた
嫁を迎へたり婿を迎へたり
小さい甥もゆきたいな
きて見りや甥の喰べる菜はない
鴨をひつ捕へ玉子を抉り出す
煮ても煮ても煮へきらぬ
燒いても燒いても燒けきらぬ
小僧は頭から汗だくだく

初句の扯鋸拉鋸は、子供同志が遊ぶ時向ひ合つて両手を各々つなぎ、さつこんびつこん木挽の眞似をして調子を取る言葉である。こんな風にして歌も唄はれる。

7. ◇ 青菜園

一個大嫂上正東
 碰着一園青菜成了精
 青頭蘿蔔坐寶殿
 紅頭蘿蔔掌正宮
 河南反了白蓮藕
 一封戰表進京城
 豆芽菜跪倒奏一本
 胡蘿蔔掛印去出征
 白菜打着黃羅傘
 芥菜前部作先行
 小葱使的銀戰桿
 韭菜使的兩刃鋒

◇ 野菜島

或る日姐さん東の方へ行くと
 野菜島はあ化けになつた
 青頭の大根は御座にござる
 紅頭の大根は御后様
 河南の白蓮藕謀反を起し
 一封の戦書を都に送る
 豆芽がそれを奏上した
 人蔘が總帥で出征した
 白菜が黄羅傘を持つてゐる
 芥子菜が先鋒で先に立つ
 小葱が使つて居るのは銀戰桿
 韭菜の使ふは兩刃鋒

牛腿瓠子掌大砲
 青豆角子掌火繩
 只聽得古碌々三聲大砲響隆隆々
 打得茄子滿身青
 打得黃瓜一包刺
 打得扁豆扯成篷
 打得豆腐尿黃尿
 涼粉嚇得戰兢兢々々
 藕王一見心害怕
 一頭鑽進稀泥坑

瓠瓜が大砲を掌る
 綠豆の莢は火繩係り
 只とんとんと砲の聲
 茄子は叩かれ青くなり
 黃瓜は叩かれ刺さげが出た
 扁豆へんまめが叩かれて廣がつた
 豆腐が叩かれて黄尿を出した
 涼粉がとどろいてびくびくしてる
 藕王之を見て心を傷め
 急いで泥に入りこむ

多分山東あたりの作であらうが、童兒向きとして正に絶品であらう。白蓮藕は蓮根、牛腿瓠子の牛腿は形容詞。涼粉は所謂ところ天の様なもの、滿洲では綠豆で作られる。

8. ◇ 兒 歌

你拍一我拍一黃雀落在大門西

あなたとわたしと手拍子一つ

你拍二我拍二黃雀落在樹當間

黄雀大門西方に落ちる

你拍三我拍三三三見九九連環

あなたとわたしと手拍子二つ

你拍四我拍四四個小孩寫大字

黄雀林の木の間落ちる

你拍五我拍五五個小孩畫老虎

あなたとわたしと手拍子三つ

你拍六我拍六六碗包子六碗肉

三三が九となる九連環

你拍七我拍七七個小孩追小雞

あなたとわたしと手拍子四つ

你拍八我拍八八個小孩吹喇叭

四人の子供が大字を寫す

你拍九我拍九九個小孩開步走

あなたとわたしと手拍子五つ

你拍十我拍十大家過了團圓日

五人の子供が虎の繪を描く

あなたとわたしと手拍子六つ

六碗の饅頭と六碗の肉と

◇ 子 供 歌

あなたとわたしと手拍子二つ

あなたとわたしと手拍子三つ

あなたとわたしと手拍子四つ

あなたとわたしと手拍子五つ

あなたとわたしと手拍子六つ

あなたとわたしと手拍子七つ

あなたとわたしと手拍子八つ

あなたとわたしと手拍子九つ

あなたとわたしと手拍子十つ

あなたとわたしと手拍子十一つ

あなたとわたしと手拍子十二つ

你拍七我拍七七個小孩追小雞

あなたとわたしと手拍子七つ

你拍八我拍八八個小孩吹喇叭

七人の子供が鶏追ひ廻す

你拍九我拍九九個小孩開步走

あなたとわたしと手拍子八つ

你拍十我拍十大家過了團圓日

八人の子供が喇叭吹き鳴らす

你拍十一我拍十一個小孩開步走

あなたとわたしと手拍子九つ

你拍十二我拍十二個小孩開步走

九人の子供が步調とつて歩く

你拍十三我拍十三個小孩開步走

あなたとわたしと手拍子十つ

你拍十四我拍十四個小孩開步走

みんなで仲よく日を暮らしましよ

子供の遊び歌で、唯調子だけで意味の連絡はない。

ハ、繼 母

1. ◇ 後老孃

貴々陽 貴々陽

◇ 繼 母

貴々陽 貴々陽 (時鳥の啼聲序語)

有錢莫討 後老娘
前娘殺雞 留雞腿

後娘殺雞 留雞腸

雞腸一掛 籬笆上
過去過來 哭一場

2. ◇ 無娘的孩子

小公雞 上草塚

無娘的孩子真難過

跟爹睡 爹打我

金があつても後妻を娶るな

前の母さんかしら鶏を煮れば

腿の上肉わたしにくれた

今度の母さんかしら鶏を煮れば

腹の臟物わたしに呉れる

臟物喰はれぬ垣根に捨てた

母さん思ひ出して泣きじやくり

◇ 母のない子

小さなをんどり積葉に上る(序語)

母のない子はどうしませう

父さんについて寝りや

父さんが叩く

跟媽睡 媽打我

跟猫睡 猫咬脚

3. ◇ 天上的星

天上的星 顆々黃

地下的小姑 無爹娘

有爺有娘 金活寶

無爺無娘 一根草

堂屋梳頭 哥々罵

厨房洗臉 嫂子嫌

哥々哥々 你莫罵

嫂子嫂子 你莫嫌

母さんについて寝りや

母さんがたゝく

猫について寝りや脚を咬む

◇ 空のお星様

空のお星様びかびか光る

下界のわたしは親なし子

親のゐた時や大事にされた

今ちや路傍の一本草よ

部屋で髪梳きや兄さんが叱る

厨で洗面すりや嫂さんが嫌ふ

兄さんそんなに叱りなさるな

嫂さんそんなに嫌ひなさるな

在家裏過 不到三五年

四五年たゝずに嫁にゆく

兩親に甘やかされた娘が兩親を失つてから、兄夫婦たちとの中の氣持を唄つたものである。

4. ◇ 嘲繼母

小白菜 地裏黃
七歲八歲沒了娘
跟着爹々還好過
就怕爹々娶後娘
娶了後娘三年整
生個兄弟比我強
他吃肉 我喝湯
端起碗 淚汪々

◇ 繼母を嘲る

小さな白菜根が黄色(序語)
七つ八つで母さん死んで
父さん頼ればいゝけれど
繼母もらつたらどうしよう
繼母もらつた三年後には
己より尙よい弟ができる
弟が肉を喰ひ己は汁を飲む
茶碗を持ってば涙がぼろぼろ

爹々問我哭什麼
碗底熱了把我燙

どうしてなくのと父さんさけば
茶碗が灼けてゐて泣くのです

親なし子の杞憂である。これでは普通の仕打でも子供の神經には鬼にも蛇にも見えるわけである。亡くなつた母を慕ふ心が緩和されない限りこの運命はあるであらう。然しこの歌では非常に父になつてゐる氣持が涙をさへかくさせる邊りが實にいちらしい。

二、子守唄

1. ◇ 馬虎來

啊啊啊
睡覺吧
馬虎來了
狼來了
虎來了

◇ 馬虎がきた

ねんねんよう
ねんねんよう
馬虎がきたよ
狼がきたよ
虎がきたよ

老和尚背着大鼓也來了

お寺の坊さんも太鼓背負つてきたよ

馬虎は麻虎子、滿洲では傳説的に非常に恐れられてきた假想的動物で正體不明。この歌は滿洲族人間に唄はれる子守唄である。

2. ◇ 小孩別哭

小孩小孩 你別哭

◇ 坊や泣くな

坊や坊やお泣きぢやないよ

過了臘八 就殺猪

臘八すぎれば豚殺す

小孩小孩 你別饒

坊や坊や喰ひしん坊はだめよ

過了臘八 就是年

臘八すぎればお正月

これは黑龍江地方の民謡、この地方の人民は一體に非常に節儉で、何かある日でないとい肉食しない風がある。臘八は師走八日でこの日には澤山御馳走が出る。前出年中行事中参照。

水、雜

1. ◇ 賣門來

賣門來 什麼門

◇ 門賣りが来た

門買ひませんか

柳樹門 幾丈高

どんな門ですか

萬丈高 騎白馬

柳の門です

高さは何丈

帶腰刀 腰刀長

萬丈あります

白馬に乗つて

宰猪羊 猪羊血

刀をさげて

刀は長い

灌老籠 籠下蚤

豚や羊を

殺してその血を

灌老籠 籠下蚤

すつぽんにかければ

すつぽんは卵を

提弄拖弄一大串

どしどし生みます

長い長い一つながりの卵を

これは子供たちが遊戯しつゝ問答式に唄ふ唄である。前出兒歌同様意味はない。

2. ◇ 小放牛

◇ 牛飼ひ

一、天上那麽靈芝 甚麼人栽呀

天の靈芝は誰が植えた

地下那麽黃河 甚麼人開呀

地の黃河は誰が開いた

甚麼人堵把我那三關口啊

誰が三關口を守れるか

甚麼人出家咬々啣一去不回來

誰が一度出て歸らなかつたか

二、天上那麽靈芝 王母娘々栽呀

天の靈芝は王母娘々が植えた

地下那麽黃河 老龍王開呀

地の黃河は龍王様が開いた

楊六郎堵把我那三關口啊

楊六郎は三關口を守ることができ

韓湘子出家咬啣一去沒回來

韓湘子は妻子を捨て、出家し

仙人となつて歸らなかつた

靈芝は一種の茸で、これを喰べれば千年の壽を保つといふ。支那の繪や彫刻によく應用されてゐる。三關口は河南省にある三大關門。王母娘々は西王娘ともよばれる。女性の王楊六郎は宋代の武人。韓湘子は韓退之の甥で八仙人の一人。この歌は牧童歌、即ち牧童たちが野原で唄ふもので、前歌後歌互に問答形をなしあちらの丘、こちらの林と言つた工合に歌ひ合ふのである。今では廣く一般民衆に親しまれてゐる。

一一一、蘇 武

前掲孟姜女の歌が南の方に歌はれるのに對して北支滿洲では蘇武の歌を知らないものはない。蘇武留胡と言へば三才の童子も知るといふ程である。

(1) ◇ 蘇武留胡

蘇武留胡節不辱

雪地又冰天

◇ 蘇武の歌

蘇武は胡に節をなす

地に雪白く天凍る

風霜十九年
渴飲雪
饑吞氈
牧羊北海邊
心存漢社稷
旄落猶未還
歷經難中難
心如鐵石堅
夜坐塞上
時聽笳聲入耳慟心酸
轉眼北風吹
雁群漢關飛
白髮娘

風霜すさぶ十九年
渴して雪にのどしめし
饑えては羊の毛を喰ふ
北海邊に羊追ひ
心にくには忘れねど
旄は落つれども還りこず
忍び難きを忍びぬく
心は鐵かはた石か
夜塞上に坐しおれば
時に喇叭に泣かされる
眼を轉ずれば北風や
雁群故國の空に飛ぶ
白髮の母はときとなく

望兒歸
紅妝守空幃
三更同入夢
兩地誰夢誰
任海枯石爛
大節定不少虧
能叫匈奴驚心碎膽
共服漢德威

我が子いかにと思ふらん
空閨守る若妻と
三更同じく寝につき
兩地互に夢をみる
海涸れ石は熔くるとも
大節毫も枉げられず
さすが匈奴も膽をぬき
漢の威徳に服しけり

蘇武は漢代の人で字を子卿と言ひ、武帝の時に中郎將の位を以つて匈奴に使したが、却つて匈奴のために海上に抑留され、爾來十有九年、羊飼ひとして虐使されながら終に使命を辱しめず、後許されて故國に歸つてからは昭帝より典屬國に任ぜられ、宣帝の時には特に關内侯の爵位を賜つた支那歴史上著名な人物である。

支那五千年の歴史は、漢民族と異民族の闘争史で、上古は匈奴人、中世以降は蒙古人、

滿洲族との鬭争が繰返され、特に匈奴人との鬭争は前後二千年に亘つてゐる。この間蘇武の如き平和使節或ひは其他の使命を以つて使し、爲に捕虜となつたものは數多いであらうが、蘇武の如く忍苦十九年、遂に節を辱めず匈奴をも感服したる者は、漢民族の今日に至るまで敬慕やまないのも無理はない。

北海邊（史記列傳に海上とあり）は今の渤海の邊である。旃羅は人名であらう。塞上は多分萬里長城を指す。笳聲は匈奴の兵が吹く喇叭の音。漢關は漢の國境。紅妝は若妻の形容。

後がき

民謡は變るものである。それには大きな何かの社會的變動がつきまとふことが多い。本質的なものは決して動くものではないが形は改變を續けるのである。殊に今次の世界改變の氣運は根底からその生活精神を建て直さなければならなくなつた。「如何なる國でも滿支の舊社會の女性の地位程低いものはないであらう。」と新天地六月號で高遊義氏の喝破せられたことも、「家庭内に在つては婦人が支配する。……支那（滿洲）人の生活を熟知すればする程、婦人に對する所謂抑壓といふが如き言葉は支那（滿洲）の生活を深く知らないことに基く……。」滿洲娘々考九〇頁滿洲事情案内所編——等といふ言葉も今後色々な面貌で面白い變化を呈することであらう。この意味で滿洲の中
等學校の唱歌中最も滿洲的なものを載録する筈であつたが割愛することにした。

尙、滿洲農民と絶對不可分な宗教行事に娘嬢まつりがある。彼等の素朴な生活様相と、その根底を流れる純真にして而も根強い民俗信仰は、強く、民族の生活にまで浸潤してゐるのであるが、これらの専門的な興味ある研究は、滿洲事情案内所編滿洲娘嬢考中に多數收録されてゐる。

近時交通の發達に伴つて、益々賑ひ、春も四月十八日（陰曆）若葉薫る沿線の驛近くなれば、華やかに投げ交はされる（ミヤコイ）の言葉は聞く者の心を誘はずにはおかない。その希願する所は人間心理のあらゆる部面をつくしてゐるやうであるが、日本のお祭りの感じとは全く違ひ家族總出で、

荷馬車にアンペラを張つた所謂蒲鉾馬車を山麓へ乗りつけ、これが祭中晝夜定住して誠に壯観な光景を示すのである。こゝにも強い生活面が現はれてゐる。
次に滿洲日日新聞の切抜きを借りてみる。

忘れなさん願かけを

レコードになる娘々祭の歌謡

華やかな滿洲の春を開幕する娘々廟會は古來陰曆四月十八日(今年は五月二十四日)に行はれるが近來では新曆によるところも少くなく十八日も湯崗子の娘々廟で盛大なお祭りが営まれ大陸の春を飾つたほどである、この滿洲大衆と切つても切れぬ娘々廟會に口ずさまれる古典味豊かな歌謡に注目した滿洲著音器會社では民謡、俚謡の歌詞、曲調蒐集調査による滿洲新歌謡創造の第一手段として娘々廟會に因む俚謡を取りあげ弘報處劉事務官の記憶してゐた古曲「四月十八日」を新京音楽院古林氏により樂譜化し、更に滿洲詩人楊葉氏の歌詞を得て「娘々廟小曲」と題して圓盤化し陰曆四月十八日を期して全滿に發賣することとなつたが歌詞の一節は次の通りである。

高粱剛抽苗、楊柳纒發芽、盼望的日子、四月十八走呀、娘々廟會去呀、熱鬧可別忘了拴娃々

(大意)「高粱も苗となつたばかり、楊柳も芽が出たばかり、待ち無れた日が来たよ、四月十八日だ、さあ行かう、娘々廟のお祭りに……賑やかなのにつり込まれ、忘れなさん願かけを」

尙最近のうた一つ。

娘々まつり

一 春は蒙古風柳も芽吹きや

嬉し羞し娘々まつり

わたし姑娘初詣り

かける御願を何とせう

二 娘心と滿洲原野

風の情けでちよくちよく青みや

鳥鋤く人どこの人

ほんにきいてみよ娘々様に

三 ほこり立つ道蒲鉾馬車で

一家總寢のお箱を仕立て

銅鑼がどんどん笛がびゅうびゅう

心騒ぎをどうしましよ

滿洲農村民謡集 終

・滿洲事情案内所刊行(習俗關係)書・

		定價	送料
滿洲及滿洲人	菊判166頁	50.	.02
滿洲農民への理解	四六110頁	50.	.02
滿洲の傳説と民話	菊134頁	60.	.04
滿洲の習俗	// 144 //	1.00.	.04
滿洲娘々考	// 382 //	4.00.	.10

康德七年十一月二十五日印刷
康德七年十二月一日發行

・滿洲農村民話集・

① 定價金一圓五十錢

新京中央通六番地

編輯人 鈴木甫

新京中央通六番地

發行人 河村清

奉天市鐵西區嘉工街三段一號

印刷人 關真

奉天市鐵西區嘉工街三段一號

印刷所 興亞印刷株式會社

新京市中央通六番地

發行所 株式會社 滿洲事情案内所

電話三一四九三八・五三〇八番
振替口座新京二二四七番

新京特別市西七馬路十四號

滿洲書籍配給株式會社

電話二一六一九一・五番

東京市本郷區本郷五丁目十二番地

滿洲書籍配給株式會社東京營業所



